

長野県千曲市

屋代遺跡群 城ノ内遺跡 9

— 都市計画道路一重山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2013

千曲市教育委員会

長野県千曲市

屋代遺跡群 城ノ内遺跡 9

— 都市計画道路一重山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2013

千曲市教育委員会



千曲市の位置

例 言

- 1 本書は、平成18年度に実施した都市計画道路一重山線改良工事に伴う屋代遺跡群城ノ内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査は、千曲市教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆・編集は寺島がおこなった。
- 4 本書掲載の遺構及び遺物の縮尺は下記のとおりである。

遺 構 図	竪穴住居跡 = 1 : 60	掘立柱建物跡 = 1 : 60	
	土坑 = 1 : 20	溝跡 = 1 : 60	
遺 物 図	土器・陶器 = 1 : 4	土器拓本 = 1 : 3	石器 = 1 : 1・1 : 2
	玉類 = 1 : 1	銭貨 = 1 : 1	
- 5 本文中の遺物実測図の表現方法は下記のとおりである。

上 師 器 断 面 =		黒色処理 =	
須 恵 器 断 面 =			
陶 器 断 面 =			
- 6 竪穴住居跡内における、炭化物・焼土の散布範囲は、網かけにより表現した。
- 7 本文中の図版の座標値及び方位は、平面直角座標系第Ⅱ系で示している。
- 8 調査によって出土した遺物のほか、実測図及び写真等発掘調査に関するすべての資料は、千曲市教育委員会が保管している。

目 次

例言

目次

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の方法	4
第3節 基本層序	5
第4節 調査日誌	6
第2章 遺跡の環境	8
第3章 遺構と遺物	16
第1節 弥生時代	16
竪穴住居跡	
土坑	
第2節 古墳時代	19
竪穴住居跡	
土坑	
溝跡	
第3節 奈良・平安時代	38
竪穴住居跡	
掘立柱建物跡	
土坑	
溝跡	
第4節 中世	53
土坑	
溝跡	
第4章 まとめ	74
写真図版	
報告書抄録	
奥付	

第1章 調査概要

第1節 調査に至る経過

都市計画道路一重山線は、国道18号から屋代工業団地を抜け「屋代田んぼ」と呼ばれる広大な水田地帯を縦断し、有明山から舌状に伸びる一重山を越えたのち再び国道18号に合流する道路として計画されているが、事業規模が大きく、また計画路線の多くが新規建設の道路となることから事業は進んでおらず、一部が工事着手されているに過ぎない。路線は当該地に広がる埋蔵文化財包蔵地を貫く形で計画されており、特に屋代遺跡群や更埴条里水田址といった千曲市内屈指の規模を誇る大遺跡地帯を通過するため、工事に先立って記録保存を目的とした発掘調査による遺跡の保護が必要となる。

一重山線改良工事に伴う発掘調査は平成4年度から開始され、国道18号から屋代工業団地へと向かう既存道路の拡幅箇所から着手された。工事の主体は道路両側を約5m拡幅するもので、歩道を含めた道路幅は20mとなる。

工事は、屋代工業団地部分と、県道白石千曲線から県立歴史館前を通り一重山へ抜ける部分に分かれて発注され、前者は屋代遺跡群域内遺跡、後者は更埴条里水田址と屋代清水遺跡の範囲内にそれぞれ入っている。平成4年度から7年度にかけて実施したのち平成14年度に再開となったが、平成15年度をもって事業は再び中断した。

第1表 平成4年度～15年度実施の都市計画道路一重山線改良に伴う発掘調査概要

調査年度	調査期間	面積	遺跡名	検出遺構
平成4年度	平成4年6月19日～8月25日	300㎡	城ノ内遺跡	竪穴住居4
平成5年度	平成6年1月26日～2月8日	350㎡	城ノ内遺跡	竪穴住居9・溝3
平成6年度	平成6年4月1日～4月13日	100㎡	更埴条里水田址	溝1
平成7年度	平成8年3月5日～3月19日	350㎡	城ノ内遺跡	竪穴住居8・土坑2・溝2
平成14年度	平成14年9月17日～10月17日	100㎡	屋代清水遺跡	土坑29・ピット34・溝3
平成15年度	平成15年6月26日～7月18日	200㎡	城ノ内遺跡	竪穴住居12・土坑16・溝2

平成17年11月17日に実施した公共事業に伴う埋蔵文化財保護協議において、千曲市建設部都市計画課から一重山線改良事業を平成18年度に再開するとの話があった。

今回の事業箇所は、平成7年度調査地点から国道403号土口バイパス接続付近までの220m区間で、事業面積は約4,400㎡におよぶ。これまで実施された事業面積を上回る規模となり、遺構密集度からも長期間の発掘調査が必要となることが予想されたことから、十分な調査期間の確保を依頼した。

平成18年4月20日に法第94条に基づく通知書が提出された。事業面積約4,400㎡の内、既存道路部分約2,900㎡については発掘調査もしくは工事立会調査が実施されているため、この部分を調査対象から除外した残り約1,500㎡について、記録保存を目的とした発掘調査を実施することとした。

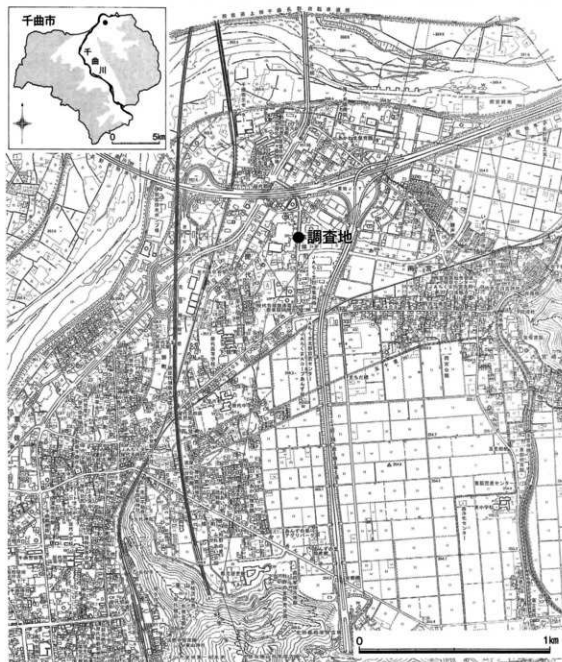
発掘調査は平成18年5月8日に着手し、現道を挟んだ東西に分かれる形で進められ、隣接する工場への出入口など掘削できない箇所があったことから最終的な調査面積は1,100㎡となり、9月5日に終了した。その後、出入口等により発掘調査できなかった部分の試掘調査と立会調査を10月18日・30

日・11月21日に、下水道埋設及び舗装工事に伴う立会調査を11月24日・27日に実施し、現場におけるすべての調査を終了した。実質の調査日数は68日間である。

平成4年度に発掘調査を開始して以来、僅か250mほどの区間の調査完了までに、実に15年という長い年月を要することとなった。

1	調査遺跡名	屋代遺跡群 城ノ内遺跡（千曲市遺跡台帳 No.31-7 調査記号 SRN9）
2	所在地	千曲市大字屋代1343番地 5 ほか
3	土地所有者	千曲市長
4	調査原因	都市計画道路一重山線改良工事
5	事業主体者	千曲市長 宮板博敏（～平成19年10月4日） 近藤清一郎（平成19年10月5日～平成24年10月17日） 千曲市長職務代理者 副市長 瀧澤嘉市（平成24年9月3日～11月10日） 千曲市長 岡田昭雄（平成24年11月11日～）
6	調査の内容	発掘調査 調査面積 1,100㎡
7	調査期間	発掘調査 平成18年5月8日～11月27日
8	調査費用	発掘調査 平成18年度 6,013,238円 整理調査 平成19年度 664,235円 平成20年度 799,435円 平成24年度 952,372円
9	調査体制	千曲市教育委員会 教育長 安西嗣宣（～平成23年12月3日） 占川弘義（平成23年12月5日～） 教育部長 塚田保隆（～平成20年度） 高松雄一（平成21年度～22年度） 小池洋一（平成23年度） 緑川 茂（平成24年度） 文化課長 金井幸一（平成18年度） 小林修二（平成19年度～20年度） 経理課課長 小池洋一（平成21年度） 小泉義和（平成22年度） 武田清志（平成23年度） 広報課課長 矢島宏雄（平成24年度） 文化財係長 矢島宏雄（～平成23年度） 翠川泰弘（平成24年度） 文化財係 小野紀男（～平成20年度） 寺島孝典（調査担当） 荒井紀彦（平成21年度） 翠川泰弘（平成22年度～23年度） 久保紀明（平成23年度） 永井洋一（平成24年度）

- 調査参加者 発掘調査 小林直文・高野貞子・竹之内常秋・中村文恵・間嶋今朝雄
 宮澤満希男・柳沢君雄・米沢須美子
- 整理調査 大沼美代子・田中富子・米沢須美子
- 10 種別・時期 集落跡 弥生時代～中世
- 11 検出遺構 弥生時代 竪穴住居跡1棟・土坑1基
 古墳時代 竪穴住居跡26棟・土坑7基・溝跡6基
 奈良・平安時代 竪穴住居跡26棟・掘立柱建物跡2棟・土坑19基・溝跡4基
 中世 土坑41基・溝跡5基
 時期不明 ビット46基
- 12 出土遺物 弥生時代～中世 土器・陶器・石器・玉類・銭貨 遺物整理コンテナ40箱



第1図 調査地位位置図 (1:20,000)

第2節 調査の方法

1 調査区の設定

今回の調査は南北に走る既設道路の両側を拡幅するものであったため、調査区は東西に分かれている。原則、掘削土の搬出はおこなわないものとして調査予定地内に仮置き場を設けたことから、一貫した調査をすることができず、それぞれ調査区を分割して進めることとした。

東調査区は北側から調査を実施し3分割したことから、調査区名を東1区・東2区・東3区とした。東1区では調査工程の関係から調査区を南北に分割している。

西調査区は南側から調査を実施し、こちらも3分割したことから、調査区名は南側から西1区・西2区・西3区とし、西2区では調査工程の関係から南北に調査区を分割している。なお、西1区は屋代遺跡群松ヶ崎遺跡の範囲内となる。

2 遺構検出

当該地は過去の調査事例等から地表下80cmほどで遺物包含層が確認でき、地表下約1mで遺構確認面となる黄褐色シルト質土が検出できる。このため、表土はバックホー(0.45m)を援用して掘削し、遺物包含層から下層を手作業により掘り下げ、遺構検出することを基本としたが、東1区では擾乱土壌が広範囲に広がっており、遺物包含層が確認できない部分が多かったことから、東1区の一部は遺構確認面までバックホーによる掘削をおこなった。

弥生時代から中世に至る遺構が検出できることから、厳密には複数の遺構確認面が設定されるべきであるが、遺物包含層内で遺構を明確に検出することは困難なため、中世に比定される遺構を除き、先述した遺構確認面において遺構検出をおこなった。

西1区では上層に中世遺構確認面が設けられ、その下層に平安時代遺構が検出できたことから、二面の調査を実施している。

なお、隣接地での大規模調査(上信越自動車道建設等)において、下層部で縄文時代の遺構が調査されているため今回の調査地点においても検出される可能性はあったが、調査幅が最大で4mほどしか確保できないことから、下層部の調査は危険と判断し、遺構調査は実施していない。

3 遺構番号の付与

検出された遺構は竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、溝跡、ピットと多岐におよぶ。

一辺3m以上を測り、主に方形を呈する遺構を竪穴住居跡とし、基本的に調査に着手した順番で遺構番号を付した。竪穴住居跡が重複している箇所では、調査着手前に先行してトレンチ調査を実施し、断面観察や出土遺物で新旧関係を把握した。

竪穴住居跡については、一旦遺構番号を付したが、整理調査の途上で複数の竪穴住居跡が同一の遺構であったり、竪穴住居跡とはならなかったりしたものもあったため、遺構を統合・変更した結果、14号・15号・16号・29号の各住居跡は欠番となっている。

規模が可程度の土坑が規則的に配置されるものを掘立柱建物跡とし、主に単独の、直径50cmを超える円形を呈する遺構や平面形が不整形で竪穴住居跡とは区別できる遺構、出土遺物のあったものを土坑とした。直径が50cm以下、もしくは出土遺物のなかった遺構はピットとして扱い、遺構番号は付していない。溝跡について、東西の調査区に検出され、明らかに同一の溝跡として認識できるものについては同じ遺構名を付した。

4 遺構の記録

検出された遺構については、平面図及び断面図、写真撮影により記録した。

平面図は、調査区内に任意の測量点を設定し、これを基準点として1/20で作成した。基準点測量については業者に委託し、座標及び標高を求めている。

各遺構の土層断面図については、必要に応じて作図した。

写真は、35mmの白黒とカラーリバーサルで撮影した。

5 整理調査

整理調査に伴う作業は平成19年度より開始した。各年度の作業内容は以下のとおりである。

平成19年度 出土遺物の洗浄・注記・接合作業。写真整理作業。

遺構ごとに取り上げた日付や出土位置等を記した台帳を作成し、遺物の整理作業を実施した。

平成20年度 遺物実測・復元作業。

遺物実測作業終了後、必要なものについて復元作業を実施した。

平成21年度 遺構図整理。

発掘調査現場において作成した遺構図を整理し、1/100縮尺の全体図を作成した。

平成22年度 遺構図第二原因作成。遺物図・遺構図浄書。

遺構図第二原因は、1/30で作成した。遺物図浄書は原寸にておこなった。

平成23年度 報告書作成。

報告書掲載の図版等を作成し、本文執筆をおこなった。

平成24年度 報告書作成。印刷製本。刊行。

報告書掲載の図版等を作成し、本文執筆、遺物写真の撮影をおこなった。

第3節 基本層序

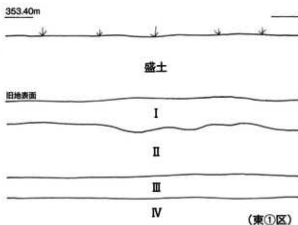
城ノ内遺跡近辺では過去に多くの発掘調査が実施されており、地表下のどの程度で遺物包含層が確認できるとかという情報を調査前から知ることができる。

当該地は、概ね地表下80cm前後で黒褐色を基本とする遺物包含層（第Ⅲ層）が確認でき、その下層に遺構確認の目安となる黄褐色シルト質土（第Ⅳ層）が存在する。遺構のすべては、この第Ⅳ層を掘り込んで構築されている。

第Ⅰ層は造成土で、現地目の状況によって内容は異なる。第Ⅱ層は褐色を呈する砂質土

で遺物は含まれない。西Ⅰ区では第Ⅱ層と第Ⅲ層の間に僅かに灰褐色砂質土の堆積が認められ、仁和4年の千曲川洪水によりもたらされた砂である可能性が高い。

なお、中世遺構が調査区全域にわたって検出されているが、中世に相当する遺物包含層は今回の調査地点では確認できていない。



第2図 基本土層（1：40）

第4節 調査日誌

【平成18年】

- 5月8日(月) 発掘機材・プレハブ・トイレ搬入。
バックホーによる表土掘削(東1区)。
- 5月9日(火) 遺構検出作業(～5月22日)。広範囲に擾乱が認められる。
1号住居跡・2号住居跡・1号土坑・1号溝跡検出、調査。
- 5月10日(水) 1号住居跡写真撮影。遺物取り上げ。
- 5月11日(木) 3号住居跡調査。
- 5月12日(金) 3号住居跡写真撮影。2号住居跡調査。
- 5月15日(月) 4号～6号住居跡調査。
- 5月17日(水) 5号住居跡写真撮影。6号住居跡遺物出土状況写真撮影。平面図作成(～5月22日)。
4号・6号住居跡写真撮影。
2号住居跡柱穴内から「Ⅵ」と書かれた石と「藤井」と書かれた軍手が出土する(紛失)。
- 5月19日(金) 7号住居跡調査。
擾乱部トレンチ調査。「1960.8/15教育大」と書かれた石が出土する。
- 5月22日(月) 基準点測量。東1北区調査終了。
- 5月23日(火) 東1北区埋め戻し。東1南区表土掘削。遺構検出作業。各遺構調査開始(～6月15日)。
- 5月24日(水) 10号住居跡調査。
- 5月25日(木) 13号住居跡調査。
- 5月26日(金) 13号住居跡写真撮影。
- 5月29日(月) 6号～9号住居跡調査。
- 5月30日(火) 7号～9号住居跡写真撮影。
- 5月31日(水) 10号住居跡写真撮影。
各遺構平面図作成(～6月15日)。
- 6月1日(木) 11号・12号住居跡調査。
- 6月2日(金) 11号住居跡から勾玉と管玉が出土する。
- 6月5日(月) 11号住居跡から白玉が出土する。
- 6月6日(火) 1号・2号掘立柱建物跡、17号住居跡調査。
- 6月7日(水) 東2区掘削・遺構検出作業。東1南区全体写真撮影。
- 6月8日(木) 基準点測量(2回目)。
- 6月12日(月) 18号・19号住居跡調査。
- 6月14日(水) 3号溝跡調査。中世房館の履跡となる。
- 6月16日(金) 東2区調査終了。



バックホーによる表土掘削(東1区)



遺構検出作業(東1区)



遺構調査作業(東1区)



遺構調査作業(東1区)

- 6月20日(火) 東3区表土掘削。遺構検出作業。
- 6月26日(月) 各遺構及び全体写真撮影。平面図作成。
- 6月27日(火) 東3区調査終了。東調査区をすべて終了。
- 6月29日(木) 西1区表土掘削。遺構検出作業。中世土壌が多く検出される。
- 7月6日(木) 各遺構写真撮影・平面図作成。
- 7月10日(月) 下層遺構調査。平安時代住居跡検出。
- 7月20日(木) 大雨により調査区水没。終日排水作業。
- 7月26日(水) 西1区調査終了。
- 7月28日(金) 西1区埋め戻し、西2区表土掘削。
- 7月31日(月) 遺構検出作業(～8月2日)。
- 8月1日(火) 各遺構調査(～8月3日)。
- 8月4日(金) 各遺構及び全体写真撮影。平面図作成。西2区調査終了。
- 8月7日(月) 西2区埋め戻し。西3区表土掘削。
- 8月9日(木) 遺構検出作業(～8月17日)。各遺構調査開始(～8月21日)。
- 8月11日(金) 36号・39号・40号住居跡写真撮影。
- 8月18日(金) 全体写真撮影。
- 8月21日(月) 平面図作成。西3南区調査終了。
- 8月22日(火) 西3北区表土掘削。遺構検出(～8月28日)。
- 8月28日(月) 43号・44号写真撮影。
- 8月29日(火) 平面図作成(～9月4日)。
- 8月30日(水) 51号・52号住居跡写真撮影。
- 8月31日(木) 47号住居跡から臼玉が出土する。
- 9月1日(金) 46号・50号住居跡写真撮影。
- 9月4日(月) 12号溝跡(中世居館の堀跡)調査。47号～49号住居跡写真撮影。
71号土坑調査。弥生時代の壺が出土。
- 9月5日(火) 12号溝跡断面図作成。西3北区調査終了。
発掘機材・プレハブ・トイレ撤収。
本日もって、現場における発掘作業を終了する。
- 10月18日～ 試掘・工事立会調査を実施(計5回)。
- 11月27日(月) 当該事業に伴うすべての調査を終了する。



遺構調査作業(東3区)



遺構検出作業(西2区)



遺構検出作業(西3区)



遺構調査作業(西3区)

第2章 遺跡の環境

屋代遺跡群は、千曲市の北端、千曲川を境に長野市と接する位置に存在している。千曲川の氾濫により形成された、東西約3km、南北約1kmの帯状に展開する自然堤防上に立地しており、縄文時代から中世に至る多くの埋蔵文化財が包蔵されている。屋代遺跡群の南一帯は後背湿地となる場所で、ここには更埴条里水田址が展開し、千曲市内でも有数の大遺跡群地帯となる。

城内遺跡は屋代遺跡群の中央付近に位置し、開発行為等に伴い記録保存を目的とした多くの緊急発掘調査が実施され、弥生時代から平安時代の集落跡や中世居館を想定する遺構などが検出されている。隣接する荒井遺跡や松ヶ崎遺跡、大境遺跡、町浦遺跡などでもこれまでに数多くの発掘調査が実施されてきており、これらの調査成果を含めると、広い範囲に各時代にわたり連続と集落が営まれていたことが明らかとなっている。

これまでに城内遺跡として実施された発掘調査は、分かっているだけで16地点を数える。同じ遺跡内を複数の開発等によって調査していることから、それぞれの調査を区別するために遺跡名の末尾に枝番を用いているが、その枝番もアラビア数字や算用数字、アルファベットが使用されるなど統一性を欠いている。枝番が重複する発掘調査も2地点存在しているほか、調査地点が明確でない調査も何件かある。

ここでは、これまでに実施された城内遺跡の調査で、地点や内容が判明しているものについて列記し、遺跡の環境とする。なお、以下に示した遺跡名及び末尾にある数字は、各調査で付された遺跡名または報告書名等をそのまま使用したものである。

城内

昭和32年から4年間にわたって東京教育大学（現筑波大学）により実施された学術発掘調査で、古墳時代を中心に19棟の竪穴住居跡が検出されている。

なお、当該調査は正確な調査地点が不明であったが、今回の発掘調査において当時の調査地点を特定することができた。このことについては第4章で説明する。

文献：更埴市教育委員会 1961「城内-信州千曲河岸の土師式集落遺跡の研究」

城内内遺跡

昭和43年度に開始された土取り工事の際に多量の遺物が出土したことから、更埴市教育委員会を調査主体者として急速実施された発掘調査である。古墳時代の竪穴住居跡のほか、中世土壘墓や火葬墓など多くの遺構が調査されている。

文献：笹澤 浩・岡田正彦 1969「更埴市城内内遺跡」『信濃考古』No.27 長野県考古学会

城内内遺跡Ⅱ（調査記号 SRC）

千代田製作所㈱（現スクラ精機㈱）工場建設に伴い昭和62年度に調査された。基礎建設部分をトレンチ状に約200mを調査し、古墳時代の竪穴住居跡18棟を検出している。

文献：更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会 1989「屋代遺跡群 城内内遺跡Ⅱ・大境遺跡Ⅲ」

城内内遺跡Ⅲ（調査記号 SRN）

長野電子工業㈱工場建設に伴い平成元年度から2年度にかけて約500mの調査を実施している。

調査では弥生時代中期1棟、古墳時代2棟、平安時代5棟の堅穴住居跡が検出されているほか、弥生時代の土坑からは中期初頭に比定される人面付壺型土器の口縁部破片が出土している。

文献：更埴市教育委員会 1991「原代遺跡群 城ノ内遺跡Ⅲ・荒井遺跡Ⅱ」

城ノ内遺跡2（調査記号 SRN2）

都市計画道路一重山線道路改良工事（以後「一重山線改良工事」とする。）に伴い平成4年度に調査が実施されている。調査面積は約300㎡を測り、古墳時代の堅穴住居跡4棟を検出している。

城ノ内遺跡3（調査記号 SRN3）

前年度に引き続き一重山線改良工事に伴い平成5年度に実施された調査で、約350㎡の発掘調査を実施している。調査では古墳時代の堅穴住居跡9棟と溝跡3基を確認している。

城ノ内遺跡Ⅳ（調査記号 SRN4）

平成7年度に長野電子工業㈱の工場建設に伴い約150㎡の調査が実施されている。

調査地点は一重山線に隣接する箇所、調査範囲内の多くが既に破壊を受けていたが、古墳時代を中心に堅穴住居跡12棟などが検出されている。

文献：更埴市教育委員会 1996「原代遺跡群 城ノ内遺跡Ⅳ」

城ノ内遺跡5（調査記号 SRN5）

平成7年度に実施された一重山線改良工事に伴う発掘調査である。約350㎡の調査がおこなわれ、古墳時代の堅穴住居跡8棟のほか土坑と溝跡がそれぞれ2基ずつ検出されている。

城ノ内遺跡6（調査記号 SRN6）

長野電子工業㈱工場建設に伴い平成14年度に調査を実施した。面積約200㎡の調査で、古墳時代1棟、平安時代7棟の堅穴住居跡が検出されている。

この他、柱痕の確認できる大きさ1m前後の方形の土坑が検出されており、その規模から比較的大型の掘立柱建物が見られていたものと考えられる。また、遺構からの出土ではないが弥生時代中期の遺物も多く出土している。

文献：更埴市教育委員会 2003「平成14年度 更埴市埋蔵文化財調査報告書」

城ノ内遺跡7（調査記号 SRN7）

一重山線改良工事に伴い平成15年度に約200㎡の調査を実施している。

調査では、古墳時代から平安時代にかけての堅穴住居跡12棟のほか、土坑16基、溝跡2基、ピット2基を検出している。

文献：千曲市教育委員会 2004「平成15年度 更埴市埋蔵文化財調査報告書」

城ノ内遺跡（調査記号 SRNO）

長野電子工業㈱のオイルタンク移設工事に伴い平成17年度に約70㎡の調査を実施した。

この工事は、既設のオイルタンクが一重山線改良工事計画路線内に設置されていたため移設するものであった。

移設箇所は、以前工場が建設されていた地点で、地表下40cmから厚さ20cmほどのコンクリート基礎が全面にわたって確認され、さらに基礎下には採石50cmと地盤改良とみられる掘削が2m以上認められた。周辺の調査状況から多くの遺構が検出される可能性もあったが、遺跡は既に破壊された状態であった。

文献：千曲市教育委員会 2007「平成17年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書」

城ノ内遺跡8 (調査記号 SRN8)

長野電子工業㈱の工場増築に伴い平成18年度に実施された調査である。

約120㎡の調査で、破壊を受けている箇所が多くあったが、古墳時代1棟、平安時代4棟の堅穴住居跡が検出されている。

文献：千曲市教育委員会 2007『歴史遺跡群 城ノ内遺跡8』

城ノ内遺跡9 (調査記号 SRN9)

平成18年度に実施した本書所収の調査地点である。

城ノ内遺跡10 (調査記号 SRN10)

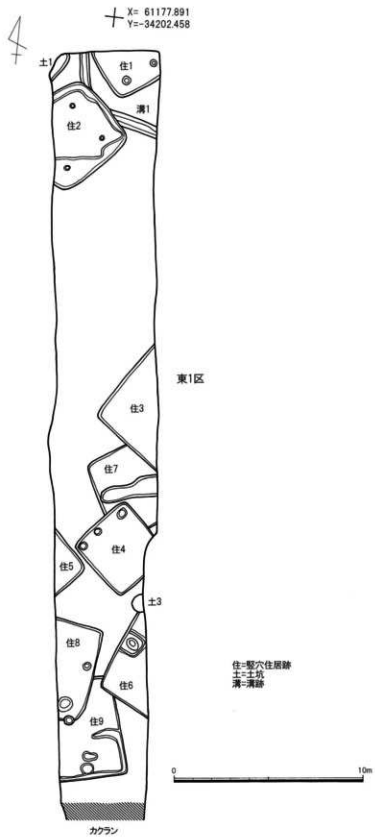
平成18年度に長野電子工業㈱の工場増築に伴い約380㎡の調査を実施し、平安時代の堅穴住居跡7棟のほか、弥生時代中期や古墳時代の溝跡が検出されている。

調査区中央には幅約7m、深さ3m以上を測り、北側に高さ40cm程の土畝状の盛土を伴う溝跡が検出され、その様相や規模などから中世居館の堀跡となると思われる。この堀跡はさらに東西方向へ延長しており、非常に規模の大きい、長大な堀跡となることが予想される。

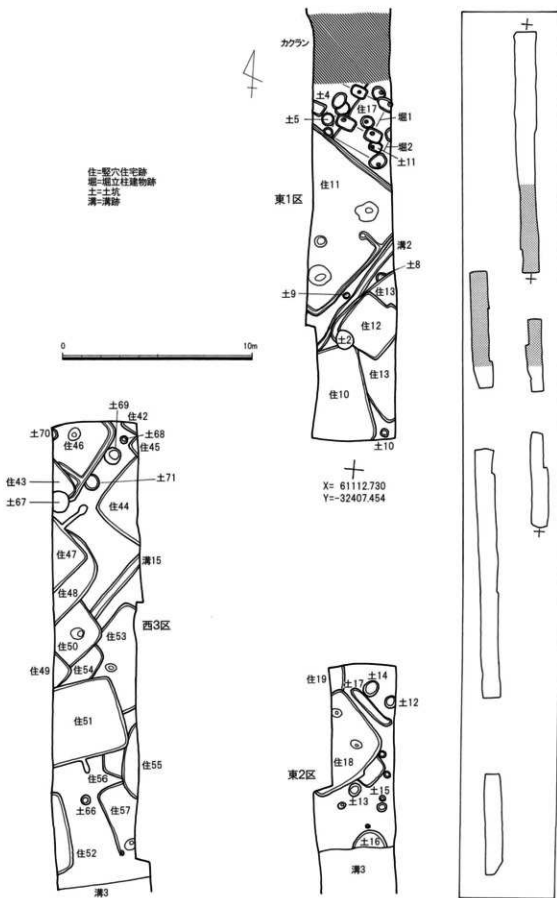
文献：千曲市教育委員会 2008『歴史遺跡群 城ノ内遺跡10・荒井遺跡6』



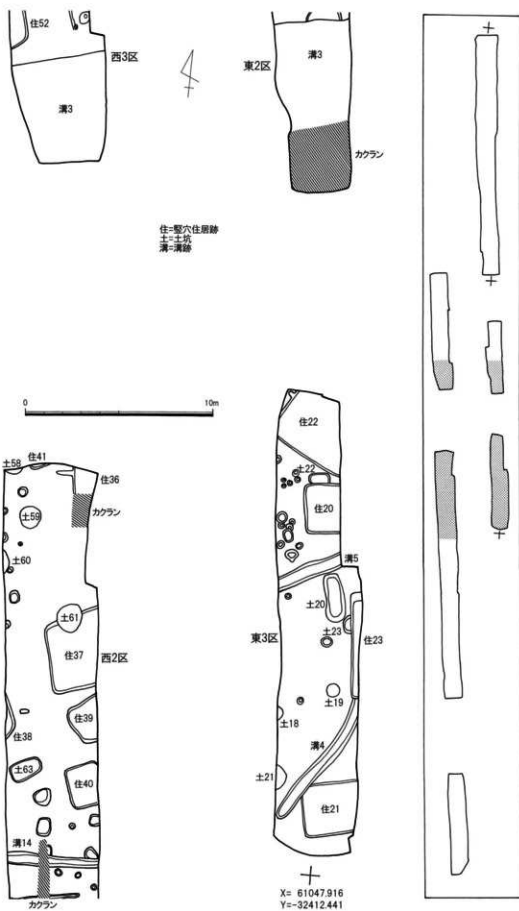
第3図 調査地周辺の遺跡分布 (1:5,000)



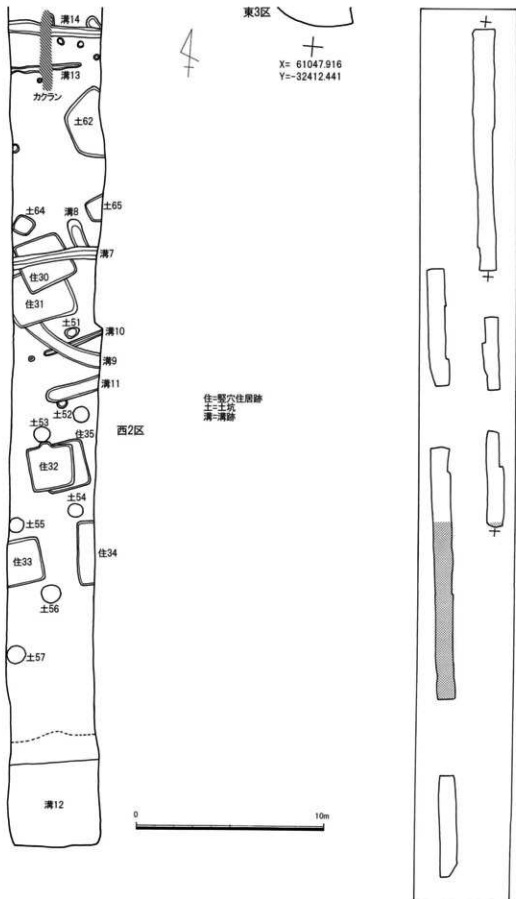
第4図 全体図① (1:200)



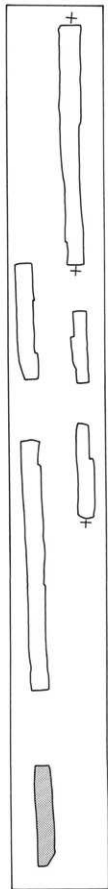
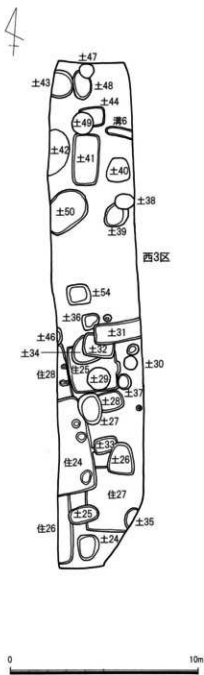
第5図 全体図② (1:200)



第6図 全体図③ (1:200)



第7図 全体図④ (1:200)



第8圖 全体圖⑤ (1:200)

第3章 遺構と遺物

第1節 弥生時代

1号住居跡

調査区：東1区 規模：不明 平面形：方形
主軸方向：N-29°-W 覆土：暗灰褐色シルト

床面：堅緻 柱穴：2基

炉：住居中央付近に地床炉

調査状況：北及び東側が調査区外により調査できていないため全体の様子は判然としなが3m前後の方形住居となる。住居中央付近に地床炉を設け、床面は全体において堅緻であるが、炉の周囲は特に硬化している。柱穴は範囲内では2基確認され、方形配列となるものと思われる。

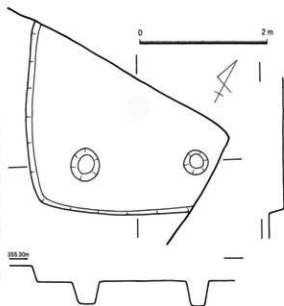
遺物は炉の周りの床面上から比較的まとまった状態で出土している。

出土遺物には壺（1～3）、甕（4～7）、鉢（8）のほか、石器（9～13）が出土している。

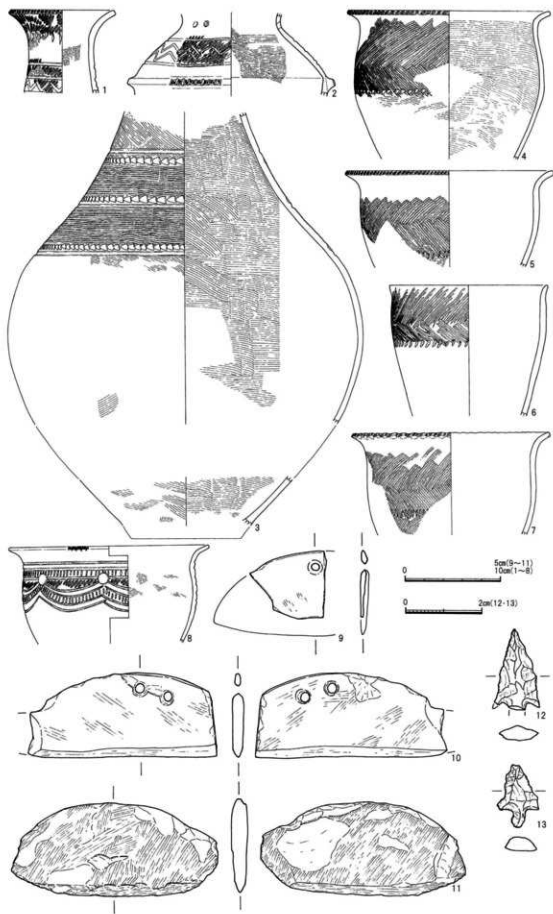
1は口縁端部と口縁部に縄文を施し、ヘラ状工具による刺突がある。頸部は縄文施文ののち、沈線による直線文と山形文が施文される。2は胴部が大きく張り出す器形となるが口縁部と底部を失っているため全体の様子は不明である。胴部上半には縄文を施文したのち、沈線により区画された内部に重山形文を施している。胴部には突帯が廻り、突端に縄文を施文したのちにキザミを施す。頸部には孔が穿たれ2ヶ対になるものと思われる。3は大型の壺で胴部上半にのみ文様がある。幅が太く浅い沈線と刺突文の間を櫛描直線文で埋めている。内面は丁寧なハケにより整形されている。4～7は胴部に櫛描羽状文が施文されており刺突文が廻る。いずれも胴部に最大径をもち、4・5・7は口縁部に縄文が施され、7のみ波状口縁となる。6は頸部の括れがはっきりせず胴形となる。口縁部も横ナアのみで縄文は施されない。8は沈線文を主体に施文された鉢で、頸部に直線文、胴部に波状沈線をそれぞれ施文し刺突も加わる。また、波状沈線の最上部にはボタンが貼付され、8区画されているものと思われる。

石器は、石包丁3点（9～11）と石鏃2点（12・13）が出土している。

10は頁岩製で2つの穿孔を持ち、両面及び刃部に研磨痕がみられる。一部に欠損がみられるがほぼ完形で、比較的多用されたのか表面や刃部の磨耗が著しい。床面に潰れた状態で出土した壺（3）と一緒に折り重なるように出土したが、壺の内部に納められたものかどうかは不明である。11は粘板岩製で全面に研磨痕がみられ刃部も丁寧な作り出されている。穿孔がなく製作途上とみることのできるが十分に使用可能なものである。12・13は黒曜石製の打製石鏃で、12は基部を欠損する。



第9図 1号住居跡（1：60）



第10图 1号住居跡出土遺物 (1~8=1:4 9~11=1:2 12·13=1:1)

71号土坑（西3区）

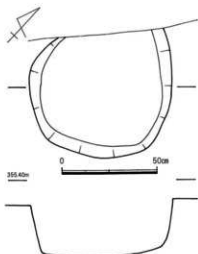
直径75cm、深さ28cmを測る円形土坑で、46号住居跡に一部を破壊されている。覆土は、やや粘りのある明黄褐色のシルト質を呈し、僅かに炭化物を含んでいる。

覆土の様相が、遺構確認面として設定している土の色調や土質と非常に良く似ているためその区別が付かず、遺構検出作業時に遺物の出土がなければ当該遺構の存在に気が付かない可能性が高かった。

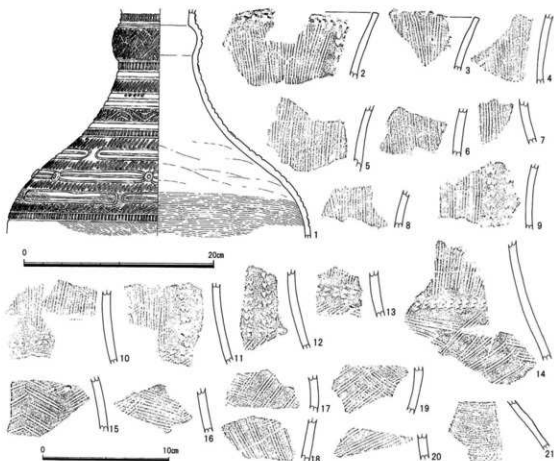
出土遺物には壺（1・21）と甕（2～20）がある。

1は頸部が袋状に膨らみ、胴部は大きく張り出す器形となる。頸部は縄文施文ののち、重要文が施文される。胴部は沈線より直線文あるいは変形工字文などを施文したのちに縄文を充填している。沈線文などの施文部分に赤色顔料が付着した痕跡が僅かに認められるため、表面には赤色塗彩が施されていた可能性がある。

2～20は同一個体であるが接合する破片は少ない。2と3が口縁部破片で、端部にはキザミが施され、上半部分は縦方向に3本単位による櫛描直線文を施文し2ヶ一對の刺突により区画をしている。この刺突は胴部付近では横方向に区画し下半部分は羽状文を施文している。また、口縁部付近には穿孔された部分も見受けられる。なお、図化はできなかったが底部付近の破片も存在する。



第11図 71号土坑（1：20）



第12図 71号土坑出土遺物（1＝1：4 2～21＝1：3）

第2節 古墳時代

2号住居跡

調査区：東1区

規模：4.6m×4.8m

平面形：兩方形

主軸方向：N-37°-W

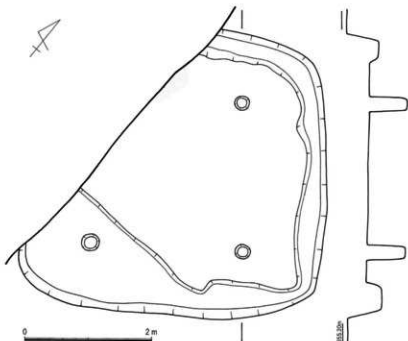
覆土：暗褐色シルト

床面：堅緻 柱穴：3基

カマド：北壁中央

調査状況：西側が調査区外により調査できていない。

1号溝と重複関係にあり、1号溝を破壊して構築している。覆土は暗い褐色系のシルト質土を基本とするが、黄褐色シルト質土が僅かに混入し、焼土ブロックや粘土ブロックが混在した覆土となる。



第13図 2号住居跡 (1:60)

遺物は小破片が僅かに出土したのみで、図化できるものはなかった。住居東隅付近で検出された柱穴内から、「藤井」と書かれた軍手と「W」と書かれた縦10cmほどの河原石が、重なるようにして出土している。

3号住居跡

調査区：東1区

規模：不明 平面形：方形

主軸方向：不明

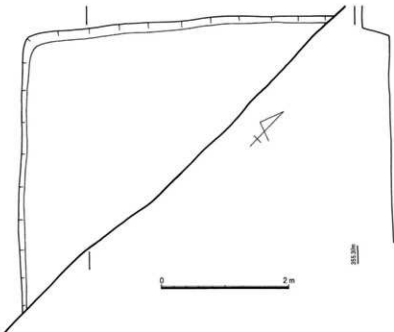
覆土：暗褐色シルト

床面：堅緻 柱穴：未検出

カマド：未検出

調査状況：調査区内において全体を検出できていないが、比較的大きな方形住居跡となり、7号住居跡を破壊して構築されている。

2号住居跡と同様の覆土で、北西壁は焼失を受けた



第14図 3号住居跡 (1:60)

ように硬化・変色している部分が確認できるが、住居自体に焼失を受けた痕跡は認められない。

遺物は小破片が僅かに出土したのみで、図化できるものはなかった。

4号住居跡

調査区：東1区 規模：3.7m×3.7m

平面形：方形 主軸方向：N-38°-W

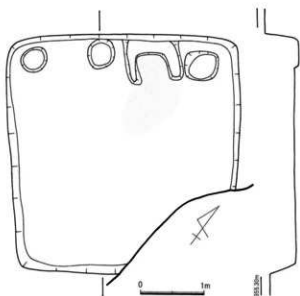
覆土：暗褐色シルト 床面：堅緻

柱穴：未検出 カマド：西壁やや北より

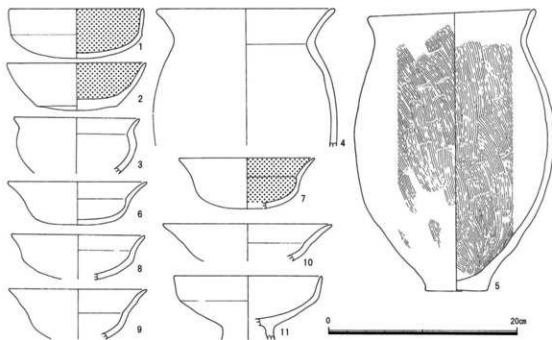
調査状況：7号住居跡を破壊して構築している。北西壁中央付近にカマド検出され、その壁際にピットが検出されている。

出土遺物には環（1・2・6～10）、鉢（3）、甕（4・5）、高環（11）がある。

環のうち1・2・7は内面が黒色処理され、そのほかはミガキのみである。



第15図 4号住居跡（1：60）



第16図 4号住居跡出土遺物（1：4）

5号住居跡

調査区：東1区

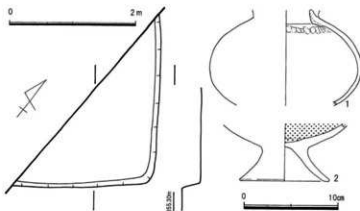
規模：不明 平面形：方形

主軸方向：不明

覆土：暗褐色シルト 床面：軟弱

柱穴：未検出 カマド：未検出

出土遺物には壺（1）と高環（2）がある。1は丁寧に磨かれ、2は内面が黒色処理される。



第17図 5号住居跡（1：60）及び出土遺物（1：4）

6号住居跡

調査区：東1区 規模：不明

平面形：方形

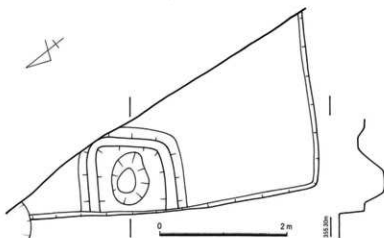
主軸方向：不明 床面：軟弱

覆土：暗褐色シルト

柱穴：未検出

カマド：未検出

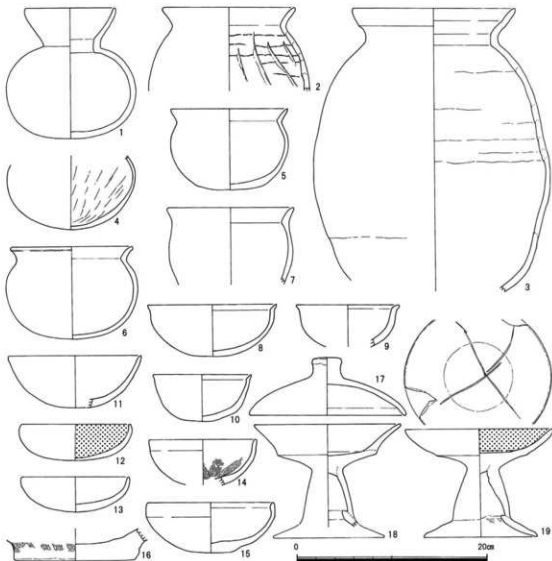
調査状況：9号住居跡と重複関係にある。北壁際に出入口施設の掘り込みが検出されている。



第18図 6号住居跡 (1:60)

出土遺物には壺 (1・4・16)、甕 (2・3)、鉢 (5~7)、坏 (8~15)、蓋 (17)、高坏 (18・19) がある。

1は丁寧なミガキが施され、口縁部は僅かに内湾する。3の口縁部は弱い有段となる。坏は12のみ内面に黒色処理が施されている。19の坏部内面は黒色処理され「×」の線刻がある。



第19図 6号住居跡出土遺物 (1:4)

7号住居跡

調査区：東1区 規模：4.4m×
 平面形：方形 主軸方向：N-20°-W

床面：軟弱 覆土：暗褐色シルト

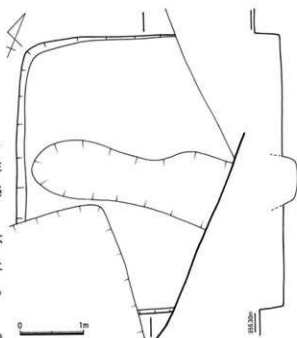
柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：3号・4号住居跡と重複関係にあり、双方の住居により破壊を受けている。また、住居中央部分に中世の溝跡が床面を破壊して構築されている。

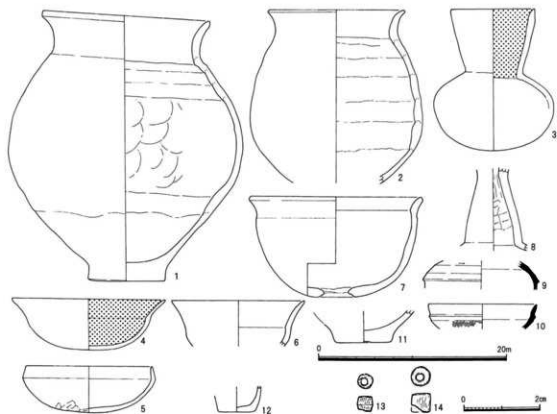
出土遺物には壺（1・3・11）、甕（2）、坏（4～6）、瓶（7）、高坏（8）、ミニチュア土器（12）と、須恵器の壺（9）、甕（10）がある。この他白玉2点（13・14）が出土している。

1は口縁部に面取りを施し、口縁部は強い横ナデにより整形している。内面は輪積痕が残る。

3は口縁部内面のみ黒色処理がされ、全面に丁寧なミガキが施されている。7は底部が穿孔された甕である。10は小破片であり判然とはしないが、4本単位の脚描波状文を施文する甕の口縁部と考えられ、内外面ともに自然釉が付着している。12はミニチュア土器とみられ、底部が3cm～3.6cmの楕円形を呈する。床面から出土した白玉2点は、いずれも滑石製で表面に研磨痕が残る。



第20図 7号住居跡（1：60）



第21図 7号住居跡出土遺物（1～12＝1：4 13・14＝1：1）

8号住居跡

調査区：東1区

規模：-×5.3m

平面形：方形

主軸方向：不明 床面：堅絨

覆土：暗褐色シルト

柱穴：1基 カマド：未検出

調査状況：覆土は2号住居跡

などと同様に一度掘り返されたような土であった。そのため検出も不鮮明で、特に南壁付近は明確な検出ができていない。

出土遺物には小型丸底(1)、壺(2)、高坏(3)がある。

1の口縁部は強いヨコナデがされ、残りはナデにより整形されている。2は壺の胴部とみられ、外面はハケ、内面はナデにより整形される。3は丁寧なミガキが施され脚端部は僅かに反り返る。坏部は欠損している。

9号住居跡

調査区：東1区 規模：5.4m×-

平面形：方形 主軸方向：N-3°-W

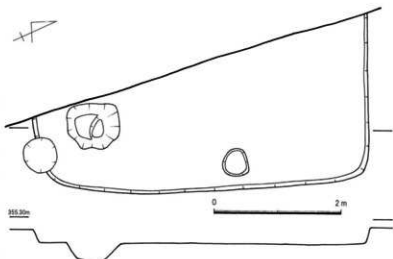
床面：堅絨 覆土：暗褐色シルト

柱穴：1基 カマド：未検出

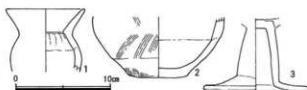
調査状況：7号・8号住居跡と重複関係にあり、それぞれの住居の破壊を受けている。南壁から東壁にかけて壁溝があり、東壁の中央付近で住居内部に間仕切溝状に屈曲して伸びている。また、南壁中央付近には出入口施設と思われるピットが検出されている。床面の数箇所は被熱によるとみられる赤く変色した場所が確認されている。

出土遺物には壺(1)、鉢(2)、甕(3・4・7)、坏(5)、小型丸底(6)、高坏(8~11)がある。

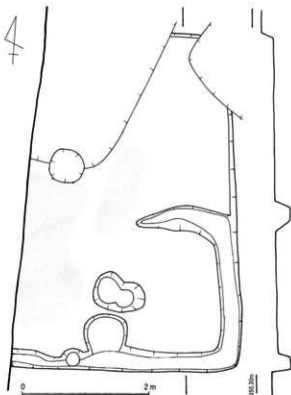
1は口縁端部に面取りがされ有段口縁となる。全体にミガキが施されている。4は内外面ともにハケにより整形され、外面は胴部付近のみにヘラケズリがされる。



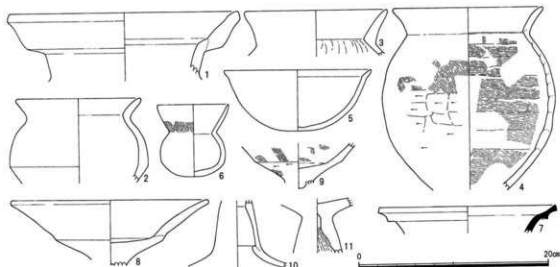
第22図 8号住居跡(1:60)



第23図 8号住居跡出土遺物(1:4)



第24図 9号住居跡(1:60)



第25図 9号住居跡出土遺物(1:4)

10号住居跡

調査区: 東1区 規模: 5.3m × -

平面形: 方形 主軸方向: N-15°-W

床面: 堅緻 覆土: 暗褐色シルト

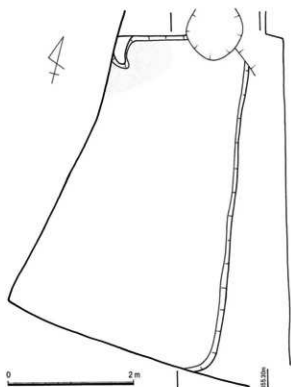
柱穴: 未検出 カマド: 北壁

調査状況: 平安時代の12号住居跡、古墳時代の13号住居跡、中世の2号土坑と重複関係にあり、12号住居跡と2号土坑に北隔壁を破壊されている。カマド付近には多量の炭化物が堆積し広範囲に散布している。カマド内部から多くの土器が出土した。

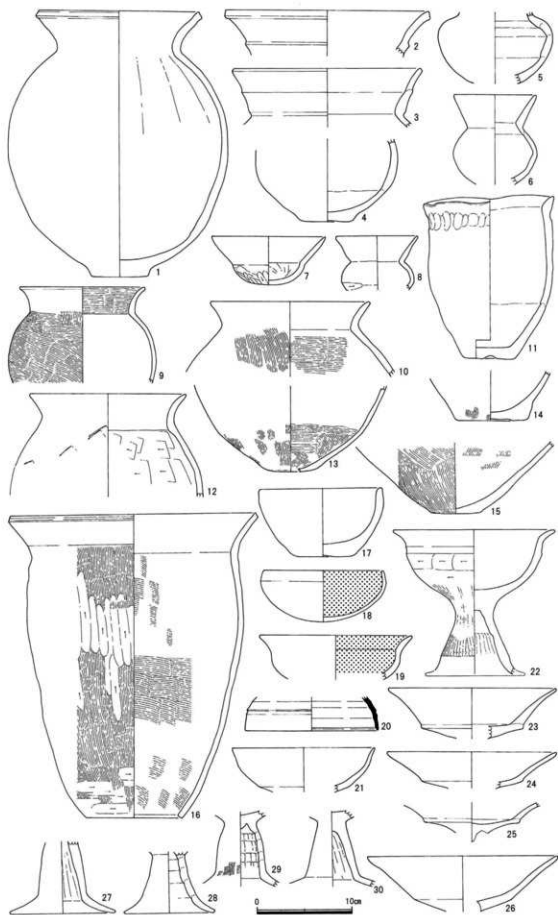
出土遺物には壺(1~5)、小型丸底(6~8)、甕(9~15)、瓶(16)、鉢(17)、坏(18~19)、蓋(20)、高坏(21~30)がある。

1~3は口縁端部が面取りされ、2・3は有段となる。1の胴部内面は板ナデによる条線がみられる。11の口縁部は大きく歪み、ユビオサエによって窪みをつくり頸部としている。12は胴部内外面ともに板ナデによる整形がみられる。16の口縁端部は凹線文のような窪みが一筋入る。胴部は全体にハケ整形し、外面は胴部で縦方向のヘラケズリ、底部付近で横方向のヘラケズリをそれぞれおこなっている。18・19の内面は黒色処理がされ、丁寧なミガキが施される。20は須恵器の蓋で、口縁部破片である。全体がロクロナデによる凹凸がある。22は坏部外面に横方向のヘラケズリを施し、脚部には粗めのハケが縦方向におこなわれ、端部は強い横ナデによる。坏部内面は横方向の丁寧なミガキが施され、内面はナデにより整形されている。

高坏は図化できなかった小破片も含め多く出土しているものの、22以外は坏部と脚部が接合するものがない。



第26図 10号住居跡(1:60)



第27图 10号住居跡出土遺物 (1:4)

11号住居跡

調査区：東1区 規模：-×8.0m 平面形：方形 主軸方向：N-43°-W 床面：堅緻

覆土：暗褐色シルト 柱穴：2基 カマド：未検出

調査状況：当該遺構の周辺は広範囲にわたり遺物が出土したため、複数の住居跡が重複しているものと想定して、11号・14号・15号・16号の住居番号を付して調査を進めたが、それぞれの住居の明確な分離ができず、また床面も一定であったことから同一の住居跡となる可能性があった。整理調査において、遺物の接合関係などから同一遺構との判断ができたため、14～16号住居跡は欠番として処理している。

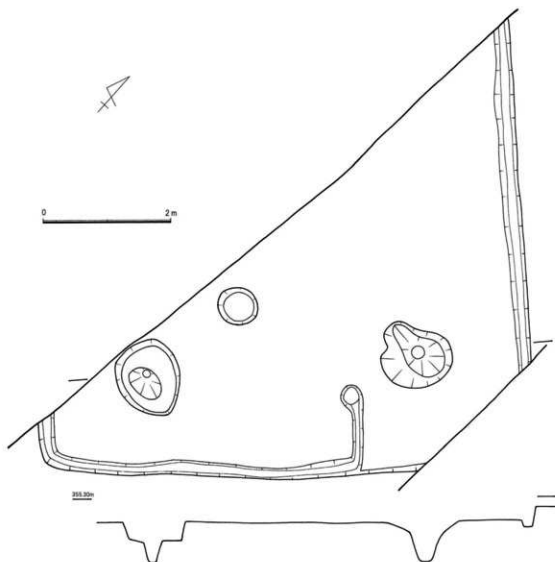
内部施設は壁溝と柱穴が検出されている。

壁溝は南東隅で一部に断絶部が認められ、住居内部へ間仕切溝となって延び、端部は柱穴状の掘り込みが伴う。柱穴は直径約1mの大きな掘り込みを持ち、柱痕を伴う。

カマドは北西壁に構築されているものと見られ、調査範囲外であるため調査できていない。

遺物は床面を中心に多量に出土している。

出土遺物には壺（1・14・15）、甕（2～9）、台付甕（10）、鉢（11～13）、小型丸底（16～24）、



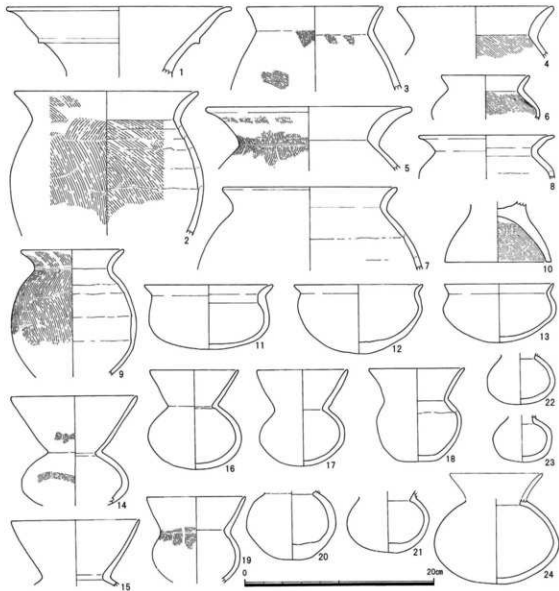
第28図 11号住居跡（1：60）

高坏 (25~46) があり、他に勾玉 (47)、白玉 (48)、管玉 (49) がそれぞれ1点ずつ出土している。

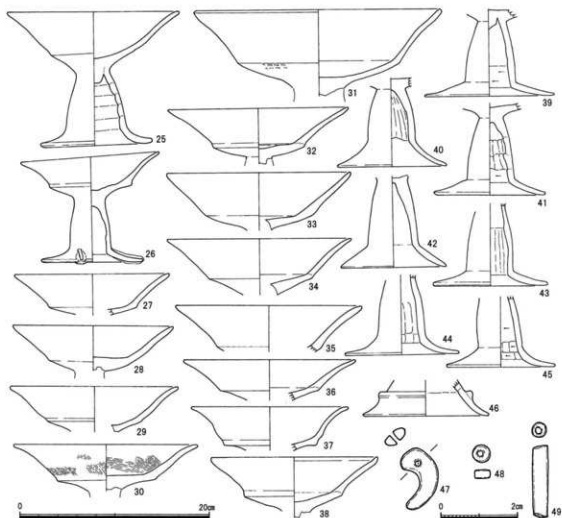
1は有段口縁で内外面ともに横方向のミガキが丁寧にされる。甕は主にハケにより器面を整形しているが、7・8はナデのみである。10は台付甕の脚部で、内面はハケにより整形している。鉢はすべて内外面ともに横方向のミガキが施されている。小型丸底は口縁部が10cm前後を測るものが多く、口縁部に最大径をもつ。14・15は口縁部が大きく開く器形となる。

高坏は多く出土しているものの全体の様子が窺えるのは2点のみで、そのほかは接合しない。主にミガキもしくはナデにより整形されており、脚部内面は25や41にみられるように輪積痕を残すものもあるが大半はナデもしくはヘラケズリで整形をおこなっている。26は脚部に紐状の粘土を貼り付けている。31は大型の高坏で坏部の直径は25.7cmを測る。

玉類は、まとまって出土してはいないが全て床面から出土しており、勾玉と管玉は緑色凝灰岩製で白玉は滑石製である。



第29図 11号住居跡出土遺物① (1:4)



第30図 11号住居跡出土遺物② (25~46 = 1 : 4 47~49 = 1 : 1)

13号住居跡

調査区：東1区

規模：5.2m × - 平面形：方形

主軸方向：N-37°-W

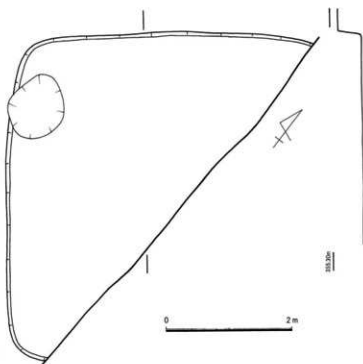
床面：堅緻 覆土：暗褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：10号・12号住居跡、2号土坑と重複関係にあり、全ての遺構の破壊を受けている。

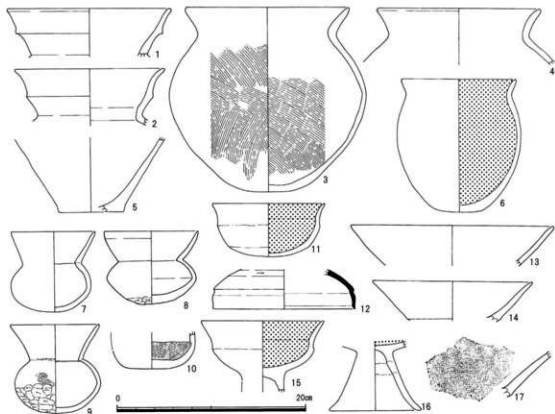
範囲内においてカマドや柱穴は確認できなかったが、床面は全体において非常に堅緻であった。

出土遺物には壺 (1・2)、甕 (3~5)、鉢 (6・11)、小型丸底 (7~10)、蓋 (12)、高坏 (13~16) がある。



第31図 13号住居跡 (1 : 60)

1・2は口縁部破片でそれぞれ有段口縁となる。強い横ナデののちに軽いミガキを施す。3はハケにより整形された甕で丸底となる。6は内面が黒色処理された丸底の鉢である。8は底部に、9は胴部から底部にかけて細かなヘラケズリが施されている。12は須恵器の蓋で、ロクロナデののち外面上部を回転させてヘラケズリしている。15・16は内面に黒色処理がされ、丁寧なミガキが施されている。17は高坏の坏部破片で、格子目状の線刻がある。



第32図 13号住居跡出土遺物 (1 : 4 17のみ1 : 3)

17号住居跡

調査区：東1区 規模：不明

平面形：方形 主軸方向：不明

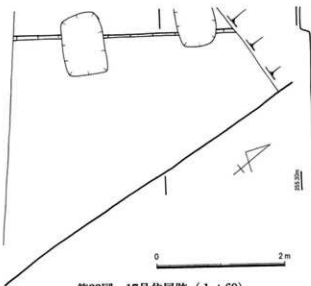
床面：堅緻 覆土：暗褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：未検出

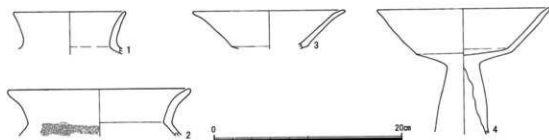
調査状況：平安時代の掘立柱建物跡の破壊を受け、また南側は11号住居跡と重複し、北側は攪乱のため調査できなかったが、検出状況から方形住居を想定する。柱穴などの内部施設は検出されなかったが、床面は全体において非常に堅緻であった。

住居のほとんどが破壊を受けており、また遺構確認面から床面までが浅かったため遺物の出土は多くなかった。

出土遺物には壺(1)、甕(2)、高坏(3・4)がある。



第33図 17号住居跡 (1 : 60)



第34図 17号住居跡出土遺物 (1 : 4)

18号住居跡

調査区：東2区

規模：4.5m×4.5m

平面形：方形

主軸方向：N-22°-W

床面：堅緻

覆土：暗褐色シルト

柱穴：2基 カマド：未検出

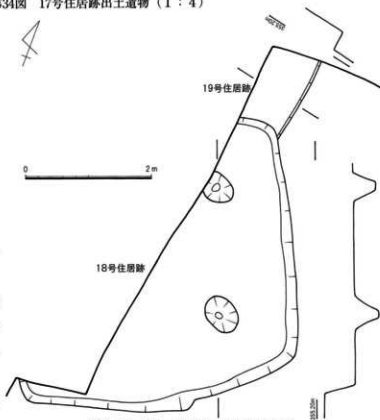
調査状況：19号住居跡を破壊して構築している。

範囲内において柱穴2基を検出し、方形配列となるものとみられる。カマドは調査区外にあると思われる。

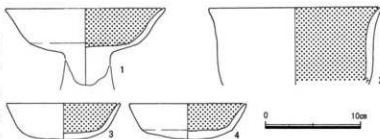
比較的良好に検出されたが遺物の出土は少ない。

出土遺物には高坏(1)、鉢(2)、坏(3・4)がある。

1は坏部内面に黒色処理している。脚部を欠くが接合部分が丸く残る。鉢・坏も内面に黒色処理がされ、丁寧にミガキが施される。3の内面には放射状の暗文がみられる。



第35図 18号・19号住居跡 (1 : 60)



第36図 18号住居跡出土遺物 (1 : 4)

19号住居跡

調査区：東2区 規模：不明 平面形：不明 主軸方向：不明 床面：軟弱 覆土：暗褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：大半が調査区外であり18号住居跡に南側を破壊されている。遺物の出土量は少なく、図化できるものはなかった。

44号住居跡

調査区：西3区 規模：不明 平面形：方形

主軸方向：不明 床面：軟弱 覆土：暗褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：45号住居跡と重複関係にある。

半分以上が調査区外にあるため調査できていないが方形を呈する住居である。柱穴またはカマド等の内部施設は検出されていない。

出土遺物には壺（1・2）、小型丸底（3）、坏（4）がある。

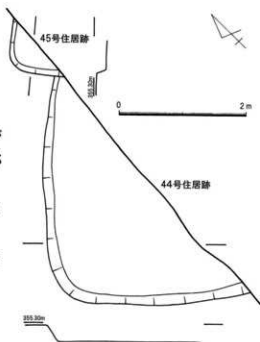
1は口縁部が直立する有段口縁の壺で、ナデののち全体にミガキを施す。

45号住居跡

調査区：西3区 規模：不明 平面形：方形

主軸方向：不明 床面：軟弱 柱穴：未検出

カマド：未検出



第37図 44号・45号住居跡（1：60）



第38図 44号住居跡出土遺物（1：4）

46号住居跡

調査区：西3区 規模：不明 平面形：方形

主軸方向：不明 床面：軟弱 覆土：暗褐色シルト

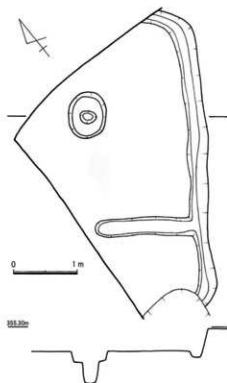
柱穴：1基 カマド：未検出

調査状況：弥生時代の71号土坑、平安時代の43号住居跡のほか、中世井戸跡と重複関係にある。範囲内において壁溝が検出され、東壁から内部へ間仕切溝も確認されている。

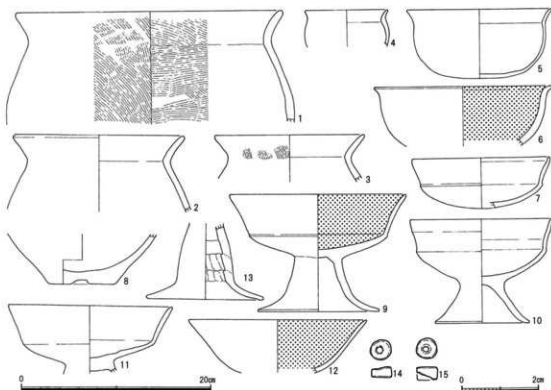
出土遺物には甕（1～3）、鉢（4～6）、坏（7）、壺（8）、高坏（9～13）がある。このほか白玉2点（14・15）が出土している。

1は全体にハケにより整形された甕で、のちに軽いミガキを施す。高坏は9～11のように口縁部が直立気味に立ち上がり、脚の比較的短い形態が多くみられる。9の内面は黒色処理される。

白玉は2点とも滑石製で床面から出土しており、15は一部が欠損する。



第39図 46号住居跡（1：60）



第40図 46号住居跡出土遺物 (1~13=1:4 14・15=1:1)

49号住居跡

調査区: 西3区

規模: 不明

平面形: 方形

主軸方向: 不明

床面: 軟弱

覆土: 暗褐色シルト

柱穴: 未検出

カマド: 未検出

調査状況: 50号住居跡を破壊して構築するが、大半が調査区外のため規模など詳細については不明である。

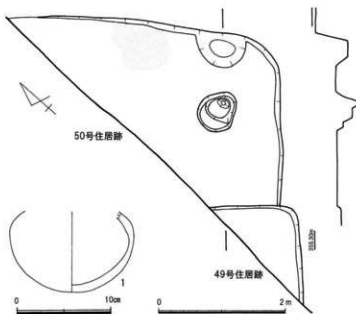
遺物の出土は壺1点のみである。外面はナデののち、全体に軽いミガキが施されている。

50号住居跡

調査区: 西3区 規模: 不明 平面形: 方形 主軸方向: N-50°-E 床面: 堅緻

覆土: 暗褐色シルト 柱穴: 1基 カマド: 北東壁中央付近

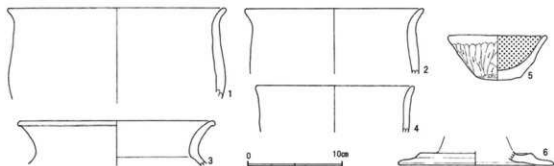
調査状況: 49号住居跡に南側を破壊され、西半分以上が調査区外のため判然としないが約4.5mを測る方形住居である。柱穴は1基のみ検出され、北東壁のカマド脇にはビット状の掘り込みが1基ある。



第41図 49号・50号住居跡 (1:60) 及び
49号住居跡出土遺物 (1:4)

出土遺物には甕（1～4）、坏（5）、高坏（6）がある。

甕は4点全てナデにより整形され、1と3はそののちに横方向のミガキが施されている。5の外面は粗く削られ内面は黒色処理される。6は有段となる高坏の脚部である。



第42図 50号住居跡出土遺物（1：4）

51号住居跡

調査区：西3区 規模：4.0m×-

平面形：方形 主軸方向：S-10°-E

床面：堅緻 覆土：暗褐色シルト

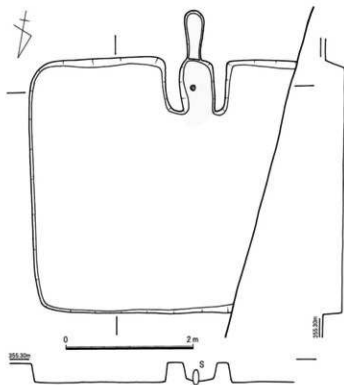
柱穴：未検出 カマド：南壁中央

調査状況：遺構の密集した場所で検出され、49号・53号・54号・55号・56号の5棟の住居跡と重複関係にあり、これらの中でもっとも新しい住居跡となる。西側は調査区外により調査できていないが、カマドの位置を中心とした場合東西方向は5m前後を測るものと推測される。カマドの位置が確認できている古墳時代の住居跡で唯一南側にカマドが構築されている住居である。

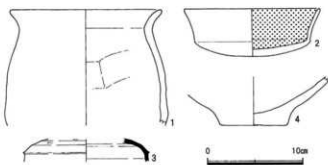
カマドは両袖と煙道が良好に残り、被熱を受けて硬化し、底面には焼土と炭化物が大量に残っていた。中央には支脚石が直立した状態で出土している。

出土遺物には甕（1）、坏（2）、蓋（3）、壺（4）がある。

1は全面ナデにより整形されており、内面の一部に板ナデがみられる。2は内外面ともに丁寧にミガキが施され、内面は黒色処理されている。3は須恵器の蓋でロクロナデののち、ヘラケズリされる。



第43図 51号住居跡（1：60）



第44図 51号住居跡出土遺物（1：4）

52号住居跡

調査区：西3区 規模： $\sim \times 4.4\text{m}$

平面形：方形 主軸方向：不明

床面：軟弱 覆土：暗褐色シルト

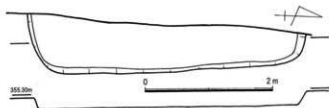
柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：調査区の南端で検出された住居跡で、他遺構との重複はない。

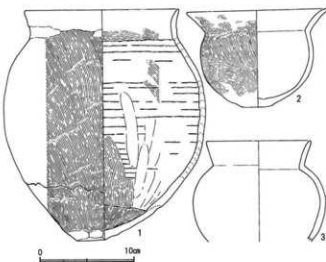
住居跡の大部分が調査区域外にあるため規模等判然としないが、方形を呈する住居跡を想定する。調査できた範囲が僅かであったためカマドや柱穴などの内部施設は検出されていない。

出土遺物には甕(1)と鉢(2)、壺(3)がある。

1は外面全体がハケにより整形され、底部にヘラケズリがみられる。内面は部分的にハケとナデにより整形しているが、輪痕が残る。2の外面はハケ、内面はナデにより整形される。3は胴部内面を除き非常に丁寧にミガキが施されている。



第45図 52号住居跡 (1:60)



第46図 52号住居跡出土遺物 (1:4)

53号住居跡

調査区：西3区 規模：不明

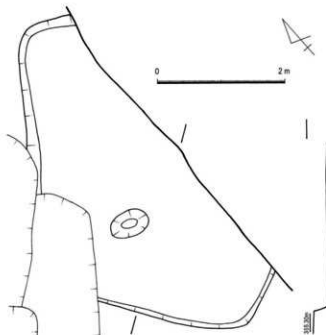
平面形：不整形方形 主軸方向：不明

床面：堅緻 覆土：暗褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：未検出

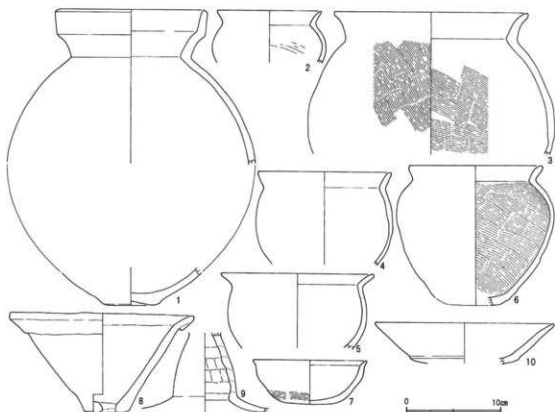
調査状況：50号・51号・54号・56号の各住居跡と重複関係にある。多くの遺構の密集する場所であったことから住居形態が判然とせず、不整形な方形を呈する。ピットが1基検出されている。

出土遺物には壺(1)、甕(3)、鉢(2・4～6)、坏(7)、甌(8)、高坏(9・10)がある。



第47図 53号住居跡 (1:60)

1は有段口縁の壺で胴部下半を失うが球形の胴部となる。全体にミガキが施される。3は内外面ともにハケによる整形が施される。4はナデ、5は横方向のミガキにより整形され、6の内面はハケが施されている。8は底部1箇所に穿孔を持つ甌で、口縁部は折り返しがされている。全体はナデにより整形されている。



第48図 53号住居跡出土遺物 (1 : 4)

54号住居跡

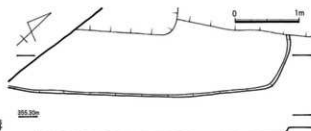
調査区：西3区 規模：不明

平面形：隅丸方形 主軸方向：不明

床面：軟弱 覆土：暗褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：50号・51号住居跡などの重複遺構が多く調査範囲が限られたため全体の様子は判然としない。図化できる遺物の出土はなかった。



第49図 54号住居跡 (1 : 60)

55号住居跡

調査区：西3区 規模：不明

平面形：隅丸方形

主軸方向：不明 床面：軟弱

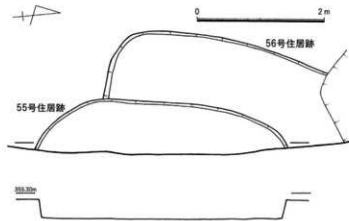
覆土：暗褐色シルト

柱穴：未検出

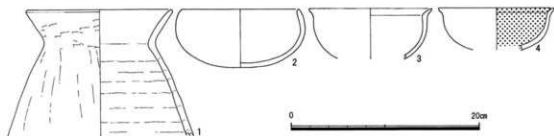
カマド：未検出

調査状況：56号・57号住居跡と重複関係にある。

出土遺物には甕(1)、鉢(2)、
坏(3・4)がある。



第50図 55号・56号住居跡 (1 : 60)



第51図 55号住居跡出土遺物（1：4）

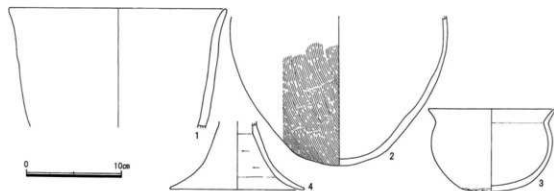
56号住居跡

調査区：西3区 規模：不明 平面形：隅丸方形 主軸方向：不明 床面：軟弱

覆土：暗褐色シルト カマド：未検出 柱穴：未検出

調査状況：51号・53号・55号住居跡と重複関係にある。範囲内において柱穴等の施設は確認できなかった。

出土遺物には甕（1・2）、鉢（3）、高坏（4）がある。3の底部はヘラケズリにより整形されている。



第52図 56号住居跡出土遺物（1：4）

57号住居跡

調査区：西3区 規模：不明 平面形：方形

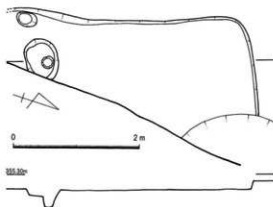
主軸方向：不明 床面：軟弱 覆土：暗褐色シルト

柱穴：1基 カマド：未検出

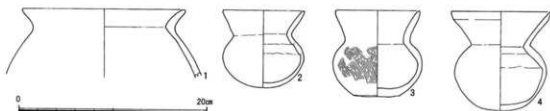
調査状況：55号住居跡と重複関係にある。平面形はやや不整形な方形を呈し柱穴が1基検出されている。

出土遺物には甕（1）と小型丸底（2～4）がある。

甕は全面がナデにより整形される。小型丸底も内外面ともにナデによる整形がされ、3のみハケもみられる。



第53図 57号住居跡（1：60）



第54図 57号住居跡出土遺物（1：4）

1号土坑（東1区）

東1区の北端で検出された遺構で、ほとんどが調査区域外となるため形態や規模などは不明である。覆土は、2号住居跡や3号住居跡同様の黒褐色と黄褐色のシルト質土が混在した攪乱土壌の様相を呈している。内部より土器破片が僅かながら出土している。

8号土坑（東1区）

13号住居跡と重複関係にある直径60cmを測る円形土坑である。

9号土坑（東1区）

11号住居跡と13号住居跡の間で検出された遺構で、直径36cmの小型の円形土坑である。

10号土坑（東1区）

東1区の南端で検出された。直径40cmを測る円形土坑である。

51号土坑（西2区）

検出された長辺90cm、短辺60cmを測る楕円形土坑である。

66号土坑（西2区）

直径50cmほどの円形土坑で、内部に柱痕が検出されている。

69号土坑（西3区）

46号住居跡と重複関係にある円形土坑で、直径90cmを測る。

1号溝跡（東1区）

2号住居跡と重複関係にあり、弥生時代中期の1号住居跡を囲むように弧を描く形で検出されている。幅70cm～50cm、深さは10cm程度と浅い。

2号溝跡（東1区）

13号住居跡と重複関係にあり、幅40cmほどで深さは5cmを測る。西3区で検出された15号溝跡と同一の遺構と考えられる。

5号溝跡（東3区）

幅70cm、深さ30cmを測る溝である。

9号溝跡（西2区）

31号住居跡と10号溝跡と重複関係にあり、幅80cm、深さ15cmを測る。

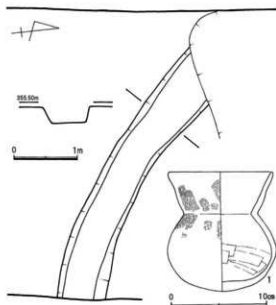
内部から壺が1点（第55図1）出土している。外面をナダ及びハケにより整形したのち、全体に縦方向に軽いミガキを施している。

10号溝跡（西2区）

9号溝跡と重複関係にある、幅30cm、深さ5cmの溝である。

15号溝跡（西3区）

西3区で検出された溝跡で、規模や方向、覆土の様相など2号溝跡と類似する点が多いことから、同一の溝跡と思われる。



第55図 9号溝跡（1：60）及び出土遺物（1：4）

第3節 奈良・平安時代

12号住居跡

調査区：東1区 規模：2.7m×2.8m 平面形：方形

主軸方向：N-44°-E 床面：堅絨 覆土：黒褐色シルト

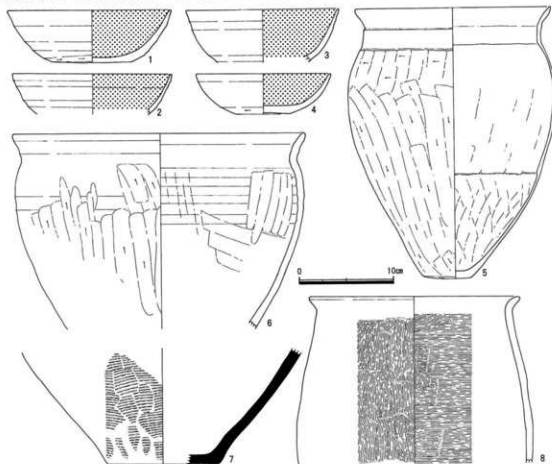
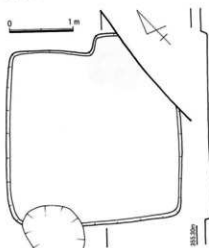
柱穴：未検出 カマド：北西壁

調査状況：13号住居跡（古墳時代）を破壊して構築する。南東隅は2号土坑（中世）の破壊を受けている。

北西壁に張り出し状のカマドを設けているが、僅かな焼土と炭化物が検出されただけである。

住居南隅には完形の甕（5）が壁に立てかけられているような状態で出土した。

出土遺物には坏（1～4）と甕（5～8）がある。坏は全 第56図 12号住居跡（1：60）
て内面が黒色処理され、丁寧にミガキが施されている。外面はロクロナデにより整形され、1と4の底部付近はヘラケズリにより整形されている。5は胴部から底部にかけて、外面はヘラケズリ、内面は板ナデを施す武藏甕である。6も外面ヘラケズリ、内面板ナデによるが、ロクロナデが部分的にみられる。7は須恵器の甕で、外面はタタキ、内面はナデにより整形される。8は口縁部が短く外半すの長胴甕で、外面は縦方向のハケ、内面はロクロ回転を利用したカキメ状のハケを施している。



第57図 12号住居跡出土遺物（1：4）

20号住居跡

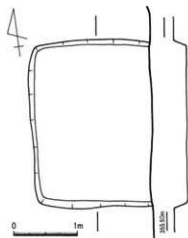
調査区：東3区 規模：2.7m×- 平面形：方形

主軸方向：不明 床面：軟弱 覆土：黒褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：東壁は調査区外により検出できていないが方形を呈し、未検出部分にカマドがあるものと思われる。内部において柱穴等の遺構は確認できておらず、床面も全体に軟弱であった。

比較的良好に検出されたものの遺物の出土量は極めて少なく、内面が黒色処理された坏の破片と須恵器の坏数点が出土しているだけで図化できるものはなかった。



第58図 20号住居跡 (1:60)

21号住居跡

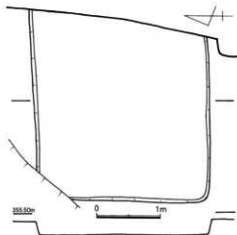
調査区：東3区 規模：-×2.8m 平面形：方形

主軸方向：E 床面：堅緻 覆土：黒褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：東壁

調査状況：東側が調査区外により検出できていないが調査区壁際に火床が確認されているため、この付近にカマドが構築されているものと思われる。床面は中央付近が非常に堅緻で、壁側に近づくほど軟弱となっていく。

土師器の坏や甕、須恵器の坏などが出土しているが小破片なため図化できなかつた。



第59図 21号住居跡 (1:60)

22号住居跡

調査区：東3区 規模：不明 平面形：方形

主軸方向：N-50°-W 床面：軟弱

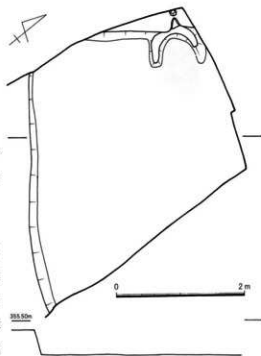
覆土：黒褐色シルト 柱穴：未検出

カマド：北西壁

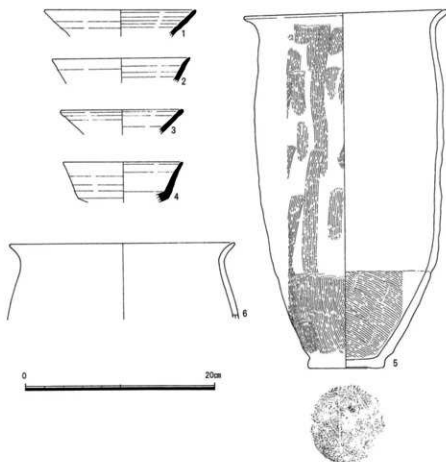
調査状況：調査区の北端に検出された住居跡である。北西壁にカマドが検出されており、焼土及び炭化物が床面に散布している。床面は中央付近で僅かに堅緻であるが全体に軟弱で凹凸がある。

出土遺物には坏(1~4)と甕(5・6)がある。

坏は全て須恵器でロクロナデにより整形される。5はカマド近くの床面に潰れた状態で出土した長胴甕で、外面は縦方向のハケ、内面は底部付近のみハケをおこない、そのほかはナデにより整形している。口縁部は強い横ナデにより短く外半する。底部には木葉痕がみられる。



第60図 22号住居跡 (1:60)



第61図 22号住居跡出土遺物 (1:4)

23号住居跡

調査区: 東3区

規模: $\sim \times 5.7\text{m}$

平面形: 方形

主軸方向: 不明

床面: 軟弱

覆土: 黒褐色シルト

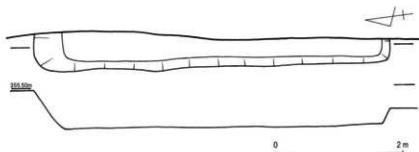
柱穴: 未検出

カマド: 未検出

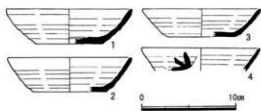
調査状況: 住居跡西側の一部だけが検出され大半は調査区外にあるため全体の様子は判然としないが、一辺5.7mを測る比較的大きな住居で、平面形は方形を呈すると思われる。カマドや柱穴などの施設は範囲内では検出されていない。

調査範囲が狭かったため遺物の出土量は僅かで須恵器の坏4点(1~4)が図化できたのみである。

いずれも内外面ともロクロナデによる凹凸が著しく底面は糸切りによる。4には墨書がみられるが字体は不明である。



第62図 23号住居跡 (1:60)



第63図 23号住居跡出土遺物 (1:4)

24号住居跡

調査区：西1区

規模：-×5.0m

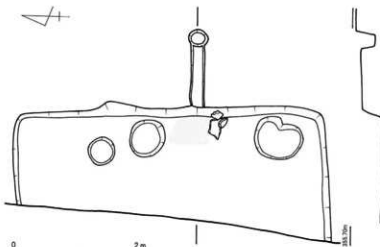
平面形：方形 主軸方向：E

床面：堅緻

覆土：黒褐色シルト

柱穴：1基 カマド：東壁

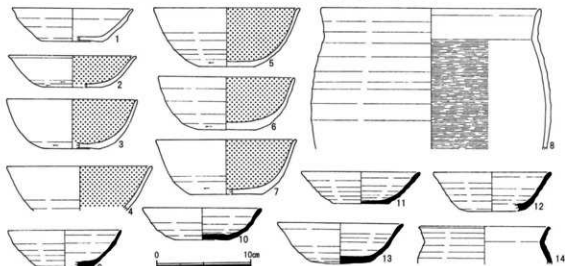
調査状況：26号～28号住居跡と重複関係にある。カマドは東壁中央付近に構築され、煙道も良好に検出された。柱穴1基のほかに、カマド脇に1基と南東隅



第64図 24号住居跡 (1:60)

に1基、ピット状の浅い掘り込みが確認されている。

出土遺物には坏(1～7・9～13)と甕(8・14)がある。1～7は土師器で1以外は全て内面に黒色処理がされる。9～13は須恵器でロクロナデによる器面の凹凸が著しい。



第65図 24号住居跡出土遺物 (1:4)

25号住居跡

調査区：西1区 規模：2.6m×2.5m 平面形：方形

主軸方向：E 床面：堅緻 覆土：黒褐色シルト 柱穴：1基

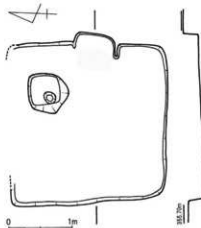
カマド：東壁

調査状況：住居北壁は中世土坑により破壊され全体を検出することはできなかった。範囲内において柱穴が1基確認され、床面は堅緻である。

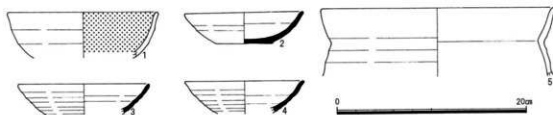
比較的良好に検出されたが遺物の出土量は少ない。

出土遺物には坏(1～4)と甕(5)がある。

1は内面を黒色処理された土師器で丁寧なミガキが施されている。2～3は須恵器で、ロクロナデによる凹凸が著しい。



第66図 25号住居跡 (1:60)



第67図 25号住居跡出土遺物 (1:4)

26号住居跡

調査区: 西1区 規模: 不明 平面形: 方形

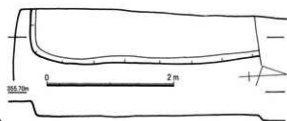
主軸方向: 不明 床面: 軟弱

覆土: 黒褐色シルト 柱穴: 未検出

カマド: 未検出

調査状況: 24号住居跡と重複関係にあり、遺構の大半が調査区外にあるため全体の検出はできていない。

遺物は僅かで、図化できるものはない。



第68図 26号住居跡 (1:60)

27号住居跡

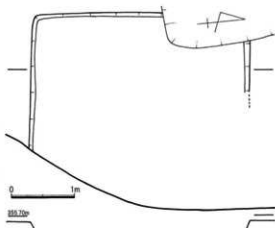
調査区: 西1区 規模: $\sim \times 3.5\text{m}$ 平面形: 方形

主軸方向: 不明 床面: 軟弱 覆土: 黒褐色シルト

柱穴: 未検出 カマド: 未検出

調査状況: 24号住居跡などと重複関係にあり全体は検出できていない。

遺物は須恵器の坏など僅かに出土しているが、図化できるものはなかった。



第69図 27号住居跡 (1:60)

28号住居跡

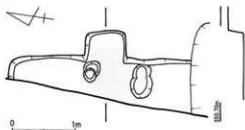
調査区: 西1区 規模: 不明 平面形: 方形

主軸方向: $N-84^{\circ}-W$ 床面: 堅緻

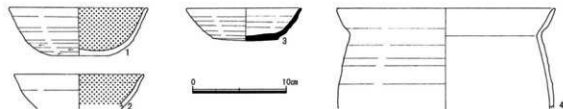
覆土: 黒褐色シルト 柱穴: 未検出 カマド: 東壁

出土遺物には坏(1~3)と甕(4)がある。

1・2は内面が黒色処理される。3は須恵器の坏でロクロナデによる器面の凹凸が著しい。



第70図 28号住居跡 (1:60)



第71図 28号住居跡出土遺物 (1:4)

30号住居跡

調査区：西1区 規模：2.8m×2.5m 平面形：方形

主軸方向：N-70°-E 床面：堅緻

覆土：黒褐色シルト 柱穴：未検出 カマド：東壁

調査状況：中世の7号溝跡が住居の中央を貫くように破壊しているほか、31号住居跡と重複関係にある。カマドに伴うとみられる火床が東壁中央付近で検出されており、カマドは7号溝跡に破壊されたものと思われる。

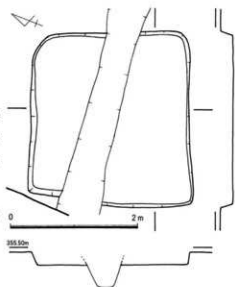
範囲内において柱穴等の施設は確認できなかったが、床面は非常に堅緻である。

比較的良好に検出されたが遺物の出土は少ない。

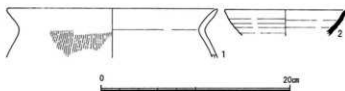
出土遺物には甕（1）と坏（2）がある。

1は口縁部を強い横ナデにより外反

させ、頸部は、くの字に屈曲する。胴部外面はハケにより整形され、内面はナデのみである。2は須恵器の坏でロクロナデによる器面の凹凸が著しい。



第72図 30号住居跡（1：60）



第73図 30号住居跡出土遺物（1：4）

31号住居跡

調査区：西2区 規模：3.4m×2.7m 平面形：方形

主軸方向：N-74°-E 床面：堅緻

覆土：黒褐色シルト 柱穴：未検出 カマド：東壁

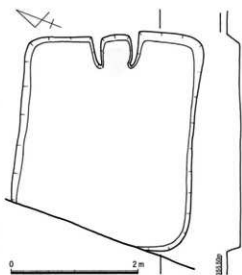
調査状況：30号住居跡・9号溝跡と重複関係にある。西側は調査区外より検出できていないが方形住居を呈すると思われ、僅かに歪な形となる。

東壁中央付近にはカマドが構築され、内部には炭化物が充満している。

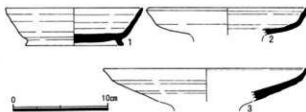
良好に検出できたものの遺物の出土量は少なく、図化できた3点の他、土師器の甕破片や須恵器の坏破片などが出土しているに過ぎない。

出土遺物には坏（1）と甕（2・3）がある。1は高台の付く須恵器の坏でロクロナデによる凹凸が著しい。2・3は須恵器の甕上半部で、2はロクロナデによる凹凸がみられるものの、3の内面はナデにより平に仕上げられている。

いずれも短い脚が付くものと思われるが、脚部の破片は出土していない。



第74図 31号住居跡（1：60）



第75図 31号住居跡出土遺物（1：4）

32号住居跡

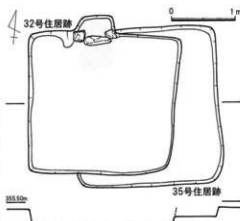
調査区：西2区 規模：2.3m×2.3m 平面形：方形

主軸方向：N-5°-W 床面：堅緻

覆土：黒褐色シルト 柱穴：未検出 カマド：北壁

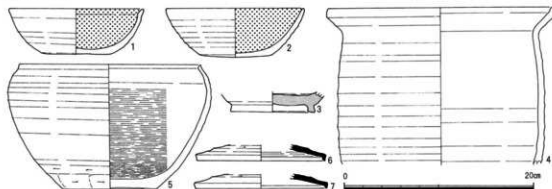
調査状況：35号住居跡と重複関係にある。カマドは石組みで北壁に構築されており、西側には袖のような張り出しがある。石で囲まれたカマド内部には鉢（5）が正位より僅かに傾いた状態で置かれていた。

出土遺物には坏（1・2）、壺（3）、甕（4）、鉢（5）、蓋（6・7）がある。



第76図 32号・35号住居跡（1：4）

坏は内面黒色処理され丁寧なミガキが施される。1の底部はヘラケズリ、2の底部はヘラケズリののちナデによりそれぞれ整形している。3は灰軸陶器の壺底部とみられる。4はロクロナデによる凹凸が著しい。5はカマドの内部から出土したもので、外面はロクロナデと底部付近はヘラケズリ。底部は糸切りののち、ヘラケズリをおこない整形している。内面はカキメがみられる。6と7は須恵器の蓋である。



第77図 32号住居跡出土遺物（1：4）

33号住居跡

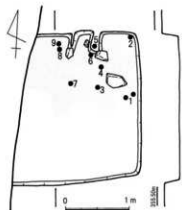
調査区：西2区 規模：2.4m×- 平面形：方形

主軸方向：N-4°-W 床面：堅緻 覆土：黒褐色シルト

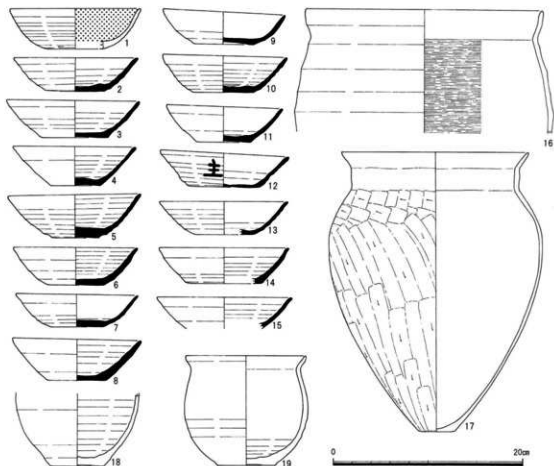
柱穴：未検出 カマド：北壁

調査状況：他遺構との重複はないが西側が調査区外により検出できていない。カマドは北壁に構築され袖の先端に礫が置かれている。また、カマドから南へ1mほど離れた床面に熱を受けたように赤く変色した平らな礫が出土し、カマド周辺からは多くの土器が出土している。

出土遺物には坏（1～15）、甕（16・17）、鉢（18・19）がある。坏は1のみが黒色処理された土師器で残りは全て須恵器となる。ロクロナデによる器面の凹凸が著しい。12は墨書土器で、墨が薄く判読が難しかったが「主」と書かれているとみられる。16は内部にカキメが施される。17は外面にヘラケズリが施された武蔵甕である。内面はナデにより整形されている。18・19は土師器の鉢である。



第78図 33号住居跡（1：60）



第79図 33号住居跡出土遺物 (1:4)

34号住居跡

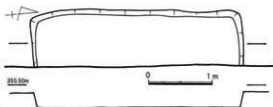
調査区: 西2区 規模: $\approx 3.3\text{m}$ 平面形: 方形

主軸方向: 不明 床面: 軟弱 覆土: 黒褐色シルト

柱穴: 未検出 カマド: 北壁

調査状況: 住居の大半が調査区外にあるため全体の調査をすることはできなかったが一辺3m前後の方形住居と思われる。カマドや柱穴等内部施設は検出されていない。調査範囲が僅かであったため、土器の出土量も少なく、3点が図化できたに過ぎない。

出土遺物には坏(1・2)と蓋(3)がある。いずれも須恵器で器面が凹凸している。



第80図 34号住居跡 (1:60)



第81図 34号住居跡出土遺物 (1:4)

35号住居跡

調査区: 西2区 規模: $2.5\text{m} \times \text{—}$ 平面形: 方形 主軸方向: 不明 床面: 軟弱

覆土: 黒褐色シルト 柱穴: 未検出 カマド: 北壁

調査状況: 32号住居跡と重複関係にある。住居の大半が32号住居跡により破壊されているため内部施設は判然とせず、遺物の出土も少なく図化できるものはなかった。

36号住居跡

調査区：西2区 規模：不明 平面形：方形

主軸方向：N-87°-W 床面：堅緻 覆土：黒褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：北壁

調査状況：調査区の北端に検出された住居で、カマド周辺部のみが調査できた。住居の大半が調査区外にあり、コンクリート基礎埋設により一部破壊を受けている。

カマドは煙道及び袖が良好に検出され、床面も含め、袖の内面や煙道などに非常に硬化した被熱箇所が確認できた。

出土遺物には坏（1～3）、甕（4）、盤（5）がある。



第82図 36号住居跡（1：60）

1の底面はヘラ切りののち、ナデにより整形しているものとみられる。中央が尖った状態のままであり、高台が付属するものと思われるがその痕跡はない。4は土師器の甕で全体がナデにより整形されている。5は盤の脚部とみられる。



第83図 36号住居跡出土遺物（1：4）

37号住居跡

調査区：西2区 規模：-×4.0m

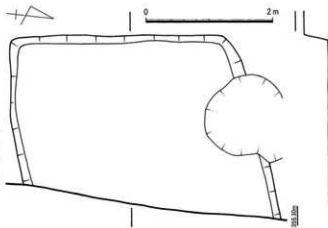
平面形：不整形 主軸方向：不明

床面：堅緻 覆土：黒褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：61号土坑（中世）に北壁の一部を破壊され、東側は調査区外により調査できず、カマドや柱穴などの施設も検出されていない。

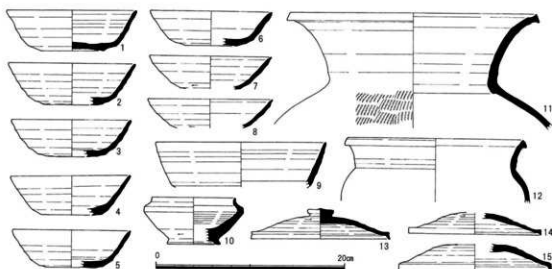
床面を中心に比較的多くの遺物が出土している。



第84図 37号住居跡（1：60）

出土遺物には坏（1～9）、鉢（10）、甕（11・12）、蓋（13～15）があり、図化できたものは全て須恵器である。

坏はロクロナデによる器面の凹凸が著しく、底部が確認できたもののうち、6以外は全てヘラケズリを施している。10は小型の鉢で口縁端部が短く直立する。胴部は大きく張り出し外面底部付近にヘラケズリがみられる。底部は高台が付属する。内面は溝の深いカキメが施され、器壁が非常に厚い。11は甕の口縁部から頸部にかけての破片で肩部分にタタキがみられる。蓋はそれぞれつまみ取り付け付近にヘラケズリがされる。13の端部は屈曲し僅かに外半する。14と15はつまみ部分を欠損する。



第85図 37号住居跡出土遺物 (1:4)

38号住居跡

調査区：西2区 規模：不明 平面形：隅丸方形

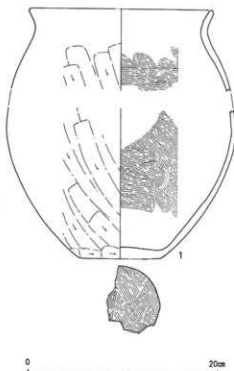
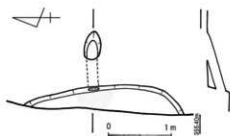
主軸方向：E 床面：軟弱 覆土：黒褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：東壁

調査状況：住居のほとんどが調査区外にあるため全体の検出には至っていない。検出はカマド付近のみにとどまり、煙道出口が付属して確認できた。

調査範囲が僅かであったため遺物の出土量は僅かである。

出土物には堯がある。外面はヘラケズリにより器面整形し、内面及び底部外面はハケにより整形している。



第86図 38号住居跡 (1:60) 及び出土遺物 (1:4)

39号住居跡

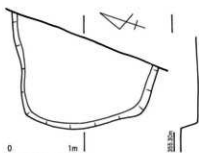
調査区：西2区 規模： $\sim \times 2.2\text{m}$ 平面形：不整形

主軸方向：不明 床面：堅緻 覆土：黒褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：未検出

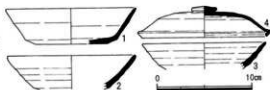
調査状況：検出状況が不鮮明で歪な平面形を呈するが床面は非常に堅緻で、特に住居中央付近は強く叩きしめられている。カマド及び柱穴等の施設は検出されていない。

遺物の出土は少なく、図化できた4点のほか土師器の坏と堯の小破片が出土したのみである。



第87図 39号住居跡 (1:60)

出土遺物には坏（1～3）と壺（4）がある。
 いずれも須恵器で、ロクロナデによる器面の凹凸
 が著しい。1の底部付近はヘラケズリが施される。
 4の端部は内側へ屈曲する形態となる。



第88図 39号住居跡出土遺物（1：4）

40号住居跡

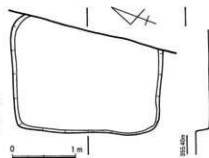
調査区：西2区 規模： $\approx 2.3\text{m}$ 平面形：方形
 主軸方向：N-78°-E 床面：堅緻 覆土：黒褐色シルト
 柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：範囲内においてカマドは検出できなかったが、東壁
 に構築されているものと思われる。柱穴等の施設は確認できて
 いない。床面は全体に堅緻である。

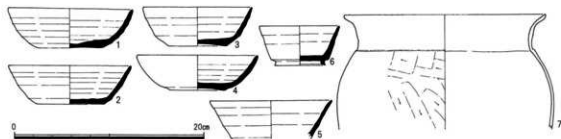
出土遺物には坏（1～6）と壺（7）がある。

坏は全て須恵器で、ロクロナデによる器面の凹凸が著しい。

1～4の底部外面は糸切り。6は高台が付属している。7は外面がヘラケズリ、内面はナデによりそ
 ぞれ整形される武蔵甕である。



第89図 40号住居跡（1：60）



第90図 40号住居跡出土遺物（1：4）

41号住居跡

調査区：西2区 規模：不明 平面形：方形 主軸方向：不明 床面：軟弱 覆土：黒褐色シルト
 柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：調査区の北端に検出された住居跡で、大半が調査区外となるため一部が調査できずに過ぎ
 ない。

調査範囲が狭かったことから遺物出土量は僅かで、土師器と須恵器の坏、土師器の甕破片のみられ
 たが図化できるものはない。

42号住居跡

調査区：西3区 規模：不明 平面形：方形 主軸方向：不明 床面：軟弱 覆土：黒褐色シルト
 柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：調査区の北端に検出された住居跡で、45号住居跡（古墳時代）と重複関係にあるが住居の
 大半は調査区外となる。

調査範囲が僅かだったため遺物の出土量は少なく、須恵器の坏と甕の破片が出土しているが図化で
 きるものはなかった。

43号住居跡

調査区：西3区 規模：不明 平面形：方形

主軸方向：N-55°-E 床面：堅緻 覆土：黒褐色シルト

柱穴：未検出 カマド：北東壁

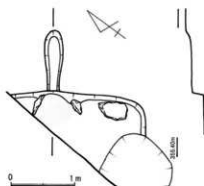
調査状況：46号住居跡（古墳時代）と中世土坑と重複関係にある。北東壁にカマドが良好に検出された。

カマドの袖にはそれぞれ平坦な石が立てられ、内部は炭化物が充満し、その下は硬化した火床が検出されている。

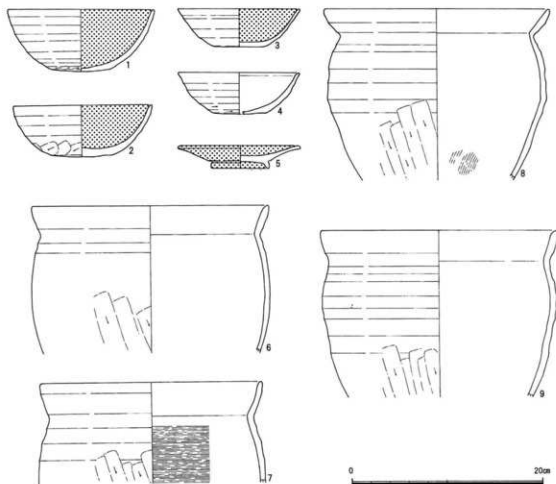
住居外部に長さ約1mを測る煙道も検出されており、煙道側面が被熱により赤紫色に変色している。住居東側の床面にはカマドに使用されたとみられる平石が出土している。

出土物には坏（1～4）、皿（5）、甕（6～9）がある。

1～3は内面が黒色処理され、丁寧に表面が磨かれる。4は黒色処理されずミガキのみである。1・2・4は底部にヘラケズリによる器面整形がみられ、3は糸切りである。5は全面が黒色処理されている。甕の外面はロクロナデによる器面の凹凸がみられ胴部下半はヘラケズリされている。内面は6・9がナデのみ、7はカキメ、8はナデのち、一部にハケがみられる。



第91図 43号住居跡（1：60）



第92図 43号住居跡出土遺物（1：4）

47号住居跡

調査区：西3区 規模：不明 平面形：方形

主軸方向：N-50°-E 床面：堅緻

覆土：黒褐色シルト 柱穴：未検出

カマド：北東壁

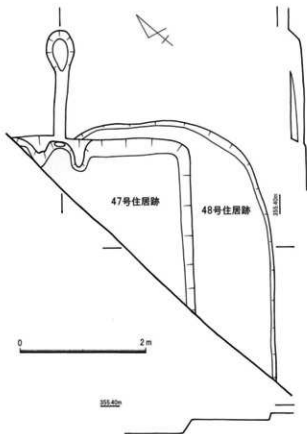
調査状況：48号住居跡と重複関係にある。

住居の大半が調査区外にあるため判然とはしないが、北東壁にカマドが検出されており、これを中心とすると約4mを測る住居跡となるものと思われる。

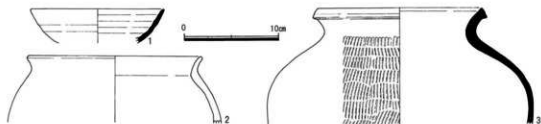
カマドは両袖と煙道、内部に火床がそれぞれ良好に検出されている。床面はカマド付近が非常に堅緻で、住居壁際はやや軟弱である。柱穴などの施設は検出されていない。

出土物には坏(1)と甕(2・3)がある。

1は須恵器の坏でロクロナデによる器面の凹凸が著しい。2は土師器の甕で内外面ともにナデにより整形される。3は須恵器の甕で外面胴部にはタクキがみられる。



第93図 47号・48号住居跡 (1:60)



第94図 47号住居跡出土遺物 (1:4)

48号住居跡

調査区：西3区 規模：不明 平面形：隅丸方形 主軸方向：不明 床面：軟弱

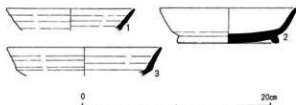
覆土：黒褐色シルト 柱穴：未検出 カマド：未検出

調査状況：47号住居跡と重複関係にある。カマド等の施設も検出されず、平面形も歪で、床面もやや凸凹しているため、住居施設とならない可能性がある。

遺物の出土量は少ない。

出土物には坏(1・2)と盤(3)がある。

全て須恵器で、ロクロナデにより整形される。2は底部に高台が付く。3は下部を欠損しているため判然としませんが、その形態から盤の口縁部と思われる。



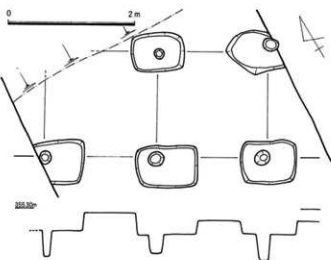
第95図 48号住居跡出土遺物 (1:4)

1号掘立柱建物跡（東1区）

調査範囲が限られ、また、北側は攪乱により破壊されているため全体の検出には至っていないが、長辺100cm～90cm、短辺60cm～70cmを測る長方形の柱穴5基が検出できた。

土坑の深さは遺構の確認面（17号住居跡床面）から30cm前後を測り、全てに直径10cm程度、深さ20cm～30cmの柱痕を持つ。柱痕間は160cm～180cmを測る。

内部から平安時代の土器片が僅かながら出土している。



第96図 1号掘立柱建物跡（1：70）

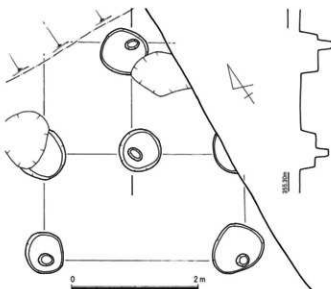
2号掘立柱建物跡（東1区）

1号掘立柱建物跡と同様に全体を検出できていないため全体の様子は判然としないが、確認できた柱穴の配置などから総柱の建物跡を想定する。

1号掘立柱建物跡の柱穴と重複しており、当遺構の柱穴が破壊されているため1号掘立柱建物跡より古い遺構となる。

土坑の平面形は円形で、直径60cm～80cmを測る柱穴6基が検出できた。それぞれに柱が伴い、柱痕間は180cm前後を測る。

内部から平安時代の遺物が出土しているが、1号掘立柱建物跡出土遺物との時間的差異は感じられないため、それほど長い時間を経ずに建替えがおこなわれたものと思われる。



第97図 2号掘立柱建物跡（1：60）

4号土坑（東1区）

長辺90cm、短辺50cmを測る楕円形土坑で、2号掘立柱建物跡を構成する柱穴を破壊して構築される。

5号土坑（東1区）

直径70cmを測る円形土坑である。

11号土坑（東1区）

1号掘立柱建物跡を構成している柱穴と重複関係にあり、長辺70cm、短辺50cmの長方形土坑である。柱痕を1箇所を持つことから、周辺で検出された掘立柱建物とは別の建物が存在していた可能性が考えられる。

12号土坑（東2区）

直径60cmの円形土坑で、深さは約30cm、内部より須恵器甕の破片が出土している。

13号土坑 (東2区)

直径70cmの円形土坑である。

14号土坑 (東2区)

長辺90cm、短辺70cmを測る楕円形を呈する土坑である。

15号土坑 (東2区)

18号住居跡と重複関係にある。一辺160cmを測る遺構であるが、18号住居跡の破壊を受けているため規模などは不明である。内部より須恵器の坏と土師器の甕破片が出土している。

16号土坑 (東2区)

3号溝跡(中世)に半分ほどが破壊されている。直径180cmの円形を呈し、深さは10cm程度と浅い。内部からは平安時代の遺物が出土し、須恵器の坏3点(第98図1～3)が陶化できた。1の底部は糸切りののちへラケズリにより整形され、高台が付属する。2・3はロクロナデによる凹凸がみられる。

17号土坑 (東2区)

長辺270cm、50cmを測る溝状の遺構である。深さは60cmと深く、内部から土師器の甕などが出土している。

18号土坑 (東3区)

約半分が調査区域外にあり全体を検出することができていないが、円形土坑となるとみられる。内部から須恵器の坏破片が出土している。

20号土坑 (東3区)

長辺250cm、短辺90cmを測る長方形土坑である。

22号土坑 (東3区)

20号住居跡と重複関係にある、一辺110cmを測る長方形土坑と考えられる。底面にビット状の掘り込みが2箇所ある。

23号土坑 (東3区)

23号住居跡と重複関係にある遺構で、大半を破壊されている。円形土坑とみられる。

35号土坑 (西1区)

27号住居跡と重複する直径120cmを測る円形土坑である。須恵器の坏1点(第98図4)が出土している。

39号土坑 (西1区)

中世の井戸跡38号土坑に一部を破壊される。直径150cmほどの円形土坑である。

48号土坑 (西1区)

中世の井戸跡47号土坑に一部を破壊される。楕円形を呈する土坑で、内部からは須恵器の坏(第98図5)が1点出土している。

62号土坑 (西2区)

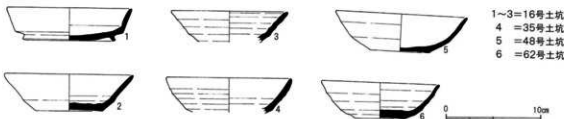
全体を検出できていないため判然としないが平面形は五角形を呈し、4m前後の規模となる。当初住居跡として調査を進めたが床面が不明瞭であり、また凹凸が著しく土坑として扱った。内部からは須恵器の坏1点(第98図6)が出土している。

64号土坑 (西2区)

一辺100cmの方形土坑で、深さは5cmほどとなる。

65号土坑（西2区）

方形を呈する土坑で、東側は調査区域外により検出できていない。内部より須恵器環の破片が僅かながら出土している。



第98図 各土坑出土遺物（1：4）

4号溝跡（東3区）

幅70cm、深さ30cmの遺構で、23号住居跡を破壊して構築される。

6号溝跡（西1区）

幅50cmを測る遺構で、東側は調査区域外により検出できていない。

8号溝跡（西2区）

中世の7号溝跡に破壊される。深さは80cmと深く、内部から須恵器の坏や壺、土師器の坏や甕の破片が多く出土しているが、図化できるものはなかった。

11号溝跡（西2区）

幅80cmほどを測り東側は調査区域外となる。

第4節 中 世

第2表 中世土坑一覧

遺構番号	調査区	形態	規 模 (cm)	覆土内容	出土遺物・備考
2号土坑	東1区	円形	直径100	暗灰色砂質土	井戸跡
3号土坑	東1区	円形	直径100	暗灰色砂質土	井戸跡
19号土坑	東3区	円形	直径70	暗灰色砂質土	井戸跡
21号土坑	東3区	円形	直径150以上	暗灰色砂質土	井戸跡
24号土坑	西1区	楕円形	長辺140 短辺100	黒褐色シルト質土	古銭1（開元通宝）
25号土坑	西1区	楕円形	長辺160 短辺90	黒褐色シルト質土	
26号土坑	西1区	不整形	一辺150	黒褐色シルト質土	古銭1（皇宋通宝）
27号土坑	西1区	楕円形	長辺170 短辺120	黒褐色シルト質土	
28号土坑	西1区	長方形	長辺130 短辺100	黒褐色シルト質土	古銭1（至和元宝）
29号土坑	西1区	円形	直径120	暗灰色砂質土	井戸跡
30号土坑	西1区	円形	直径70	暗灰色砂質土	井戸跡
31号土坑	西1区	長方形	長辺250以上 短辺100	黒褐色シルト質土	
32号土坑	西1区	長方形	長辺170 短辺120	黒褐色シルト質土	
33号土坑	西1区	長方形	長辺120 短辺80	黒褐色シルト質土	

34号土坑	西1区	円形	直径120	黒褐色シルト質土	
36号土坑	西1区	不整円形	直径100	黒褐色シルト質土	
37号土坑	西1区	円形	直径80	黒褐色シルト質土	
38号土坑	西1区	円形	直径100	暗灰色砂質土	井戸跡
40号土坑	西1区	円形	直径120	暗灰色砂質土	井戸跡
41号土坑	西1区	長方形	長辺270 短辺140	黒褐色シルト質土	
42号土坑	西1区	円形	直径250以上	暗灰色砂質土	井戸跡 天目茶碗 1
43号土坑	西1区	円形	直径150	黒褐色シルト質土	
44号土坑	西1区	長方形	長辺140 短辺100	黒褐色シルト質土	
45号土坑	西1区	長方形	長辺120 短辺100	黒褐色シルト質土	
46号土坑	西1区	円形	直径100	黒褐色シルト質土	
47号土坑	西1区	円形	直径80	暗灰色砂質土	井戸跡
48号土坑	西1区	楕円形	長辺150 短辺90	黒褐色シルト質土	
49号土坑	西1区	円形	直径120	暗灰色砂質土	井戸跡
50号土坑	西1区	楕円形	長辺250以上 短辺190	黒褐色シルト質土	
52号土坑	西2区	円形	直径90	暗灰色砂質土	井戸跡
53号土坑	西2区	円形	直径80	明灰黄色粘質土	井戸跡
54号土坑	西2区	円形	直径80	暗灰色砂質土	井戸跡
55号土坑	西2区	円形	直径80	暗灰色砂質土	井戸跡
56号土坑	西2区	円形	直径100	明灰黄色粘質土	井戸跡
57号土坑	西2区	円形	直径100	暗灰色砂質土	井戸跡
58号土坑	西2区	円形	直径100以上	暗灰色砂質土	井戸跡
59号土坑	西2区	円形	直径110	暗灰色砂質土	井戸跡
60号土坑	西2区	円形	直径130以上	暗灰色砂質土	井戸跡
61号土坑	西2区	円形	直径140	暗灰色砂質土	井戸跡
63号土坑	西2区	長方形	長辺170 短辺100	黒褐色シルト質土	
67号土坑	西3区	円形	直径110	暗灰色砂質土	井戸跡



第99図 各土坑出土遺物 (1 = 1 : 4 2 ~ 4 = 1 : 1)

3号溝跡 (東2区・西3区)

幅5m以上を測る溝状遺構で、東西方向に構築される。東2区で検出された遺構は南側に攪乱が認められるため全体を調査できておらず、また、方向や規模など様相が同じ西3区で検出された溝状遺構も南側は調査できていないため、詳細な規模は不明である。

内部から内耳鍋破片や陶磁器片が僅かに出土しているため、中世の遺構として考えることができ、その規模から、周辺で検出されている居館の堀跡を想定する。深さは約2mを測る。

7号溝跡 (西2区)

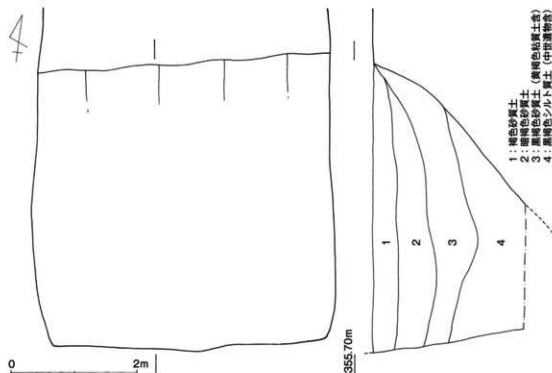
30号住居跡の中央部分を東西に掘り込む溝で、幅60cm、深さ30cmを測る。

12号溝跡 (西2区)

調査区の南端で検出され、全体は検出できていない。調査区幅が狭く、湧水が著しかったことから底面までは調査できていないが、深さは2m以上を測るものと思われる。

溝跡の北側には、幅2m前後の黄褐色シルト質土が併行して検出され、断面観察により12号溝跡に関連する掘り込み(遺構)であることが判明している。

内部からカワラケ片や内耳鍋片が出土していることから、中世の遺構として考えられ、その様相から中世居館の堀跡を想定するものである。



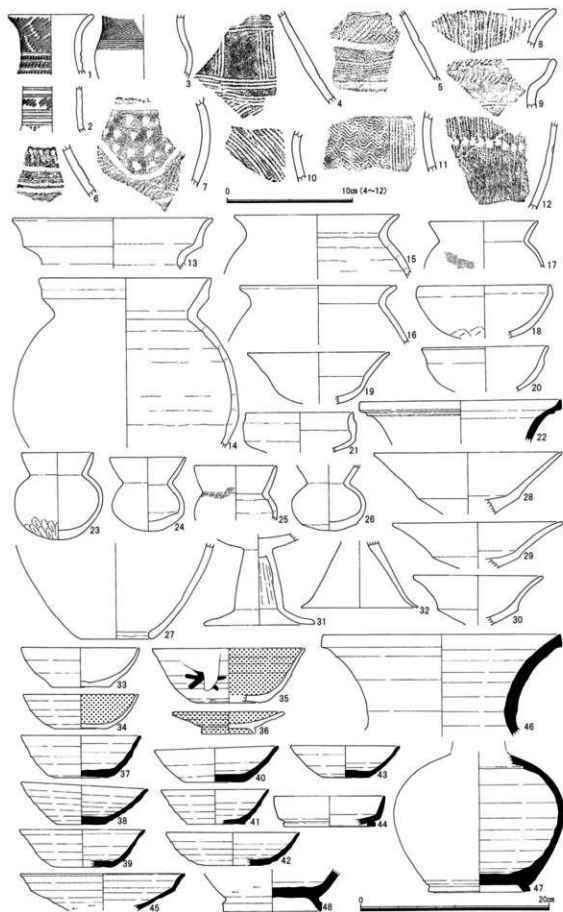
第100図 12号溝跡と土層断面 (1:60)

13号溝跡 (西2区)

幅40cm前後の溝である。内部より遺物の出土はないが、中世井戸跡とした円形土坑内の覆土と同様の暗褐色を呈する粗い砂質土を覆土となるため、中世の溝跡と考えられる。

14号溝跡 (西2区)

幅60cm前後、深さ20cmを測る。13号溝跡同様に暗褐色砂質土を覆土とする遺構で、内部からの遺物の出土はないが、中世の遺構と考えられる。



第101図 遺構外出土遺物 (1~3・13~48=1:4 4~12=1:3)

第3表 出土遺物観察表①

番号	器種	法 量 (cm)		外 面	整 形 ・ 調 整 ・ 文 様	内 面	備 考
		口縁部	胴部				
1号住居跡 (第10図)							
1	壺	10.6			8.6	口縁部：縄文及び刺突 胴部：沈線文及び山形文	口縁部：ヨコミガキ ハケ・ナデ
2	壺	21.9			7.7	ヨコミガキ 胴部に尖帯 縄文のうち沈線間に重山形文	口縁部：ヨコミガキ ハケ・ナデ
3	壺	37.6			44.0	沈線文・刺突・8本単位縹掛羽状文 胴部ハケ 胴部ハケ→ヨコミガキ	ハケ
4	壺	21.0	19.9		15.5	6本単位縹掛羽状文 胴部に刺突 胴部：ハケ→軽いタチミガキ	ハケ→ミガキ
5	壺	21.6	18.8		10.1	5本単位縹掛羽状文 胴部に刺突 胴部：ハケ	ヨコミガキ
6	壺	16.4	16.2		13.7	4本単位縹掛羽状文 胴部に刺突 胴部：ナデ→タチミガキ	ナデ→ヨコミガキ
7	壺	20.4	17.8		10.7	流状口縁 6本単位縹掛羽状文 胴部に刺突	ヨコミガキ
8	鉢	21.0	18.5		10.2	胴部：沈線・刺突 胴部：流状沈線8区画 ボタン附付	ハケ→ミガキ
71号土坑 (第12図)							
1	壺	32.0			23.8	胴部：縄文→重線文 沈線間に刺突 胴部：重線工字文→縄文重填 胴部：重線工字文→縄文重填 胴部：重線工字文→縄文重填 胴部：重線工字文→縄文重填	ナデ・ハケ 横ナデ?
2	壺					口縁部：キギミ 口縁部一胴部：3本単位縹掛刺突文・2×1対の刺突による	ナデ・ミガキ
20	壺					区画 胴部：縹掛羽状文	
21	壺					縹掛刺突文・縄文	ナデ
4号住居跡 (第16図)							
1	坏	14.0			5.1	ヨコミガキ	黒色処理・ヨコミガキ
2	坏	14.4			5.0	ヨコミガキ	黒色処理・ヨコミガキ
3	鉢	13.1	12.6		5.8	ヨコミガキ	黒色処理・ヨコミガキ
4	壺	19.0	19.4		14.4	口縁部：ヨコナデ 胴部：タチミガキ	ヨコミガキ
5	壺	17.3	20.8	6.5	29.5	口縁部：ヨコナデ 胴部：ハケ・ナデ	ハケ
6	坏	14.6			4.5	ヨコミガキ	ヨコミガキ
7	坏	14.4			5.3	ヨコミガキ	黒色処理・ヨコミガキ
8	坏	14.0			4.7	ヨコミガキ	ヨコミガキ
9	坏	14.4			5.2	ヨコミガキ	ヨコミガキ
10	坏	18.0			3.9	ヨコミガキ	ヨコミガキ
11	高坏	15.6			6.7	ヨコミガキ	ヨコミガキ

第4表 出土遺物観察表②

番号	器種	法 桌 (cm)		外 面		内 面	備 考
		口縁部	底部	器高			
5号住居跡 (第17区)							
1	波	16.0		9.0	ヨコミガキ	ヨコミガキ・ナデ	
2	高杯		9.4	6.2	坏部:ヨコミガキ 胴部:タチミガキ	黒色処理・ヨコミガキ ナデ	
6号住居跡 (第19区)							
1	変	9.4	13.7	13.5	タチミガキ	口縁部:ヨコミガキ 胴部:ナデ	
2	変	14.0	17.0	8.7	ナデ	口縁部:ヨコナデ 胴部:板ナデ?	
3	裏	17.1	24.7	29.7	口縁部:ヨコナデ 朝い右段 胴部:ナデ	ナデ	
4	放		13.6	7.7	タチミガキ	板ナデ	
5	鉢	12.2	12.5	8.4	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
6	鉢	12.8	14.0	9.7	タチミガキ	ヨコミガキ	
7	鉢	13.2	13.0	8.1	口縁部:ヨコナデ 胴部:ナデ	ナデ	
8	杯	13.6		5.4	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
9	杯	10.8		4.4	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
10	杯	10.4		4.9	ヨコミガキ	ヨコミガキ	
11	杯	14.0		5.4	ナデ	ナデ→朝いヨコミガキ	
12	杯	11.5		3.9	口縁部:ヨコミガキ 胴部:タチミガキ	黒色処理・タチミガキ	
13	杯	11.2		3.7	器面荒丸	ヨコミガキ	
14	杯	11.2		4.8	ナデ	ナデ→ハケ	
15	杯	13.2		5.4	ナデ	朝いヨコミガキ	
16	放		12.8	3.4	ハケ・ヨコミガキ	ナデ	
17	蓋	16.2		6.1	タチミガキ	タチミガキ 口縁部部:ヨコミガキ	
18	高杯	15.4		10.9	タチミガキ	坏部:ヨコミガキ 胴部:ナデ	
19	高杯	15.4		11.8	坏部:ヨコミガキ 胴部:タチミガキ	坏部:黒色処理・ヨコミガキ 「×」線刷 胴部:ナデ・ハケ	
7号住居跡 (第21区)							
1	蓋	17.4	24.5	8.0	口縁部:ヨコナデ 器面取り 胴部:ヨコミガキ・ナデ	ナデ 輪痕が残る	
2	蓋	14.2	18.3	18.1	口縁部:ヨコナデ 胴部:タチミガキ	ナデ 輪痕が残る	

第5表 出土遺物観察表③

番号	器種	法 量 (m)		外 面		整 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考	
		口縁部	胴部	口縁部	胴部	口縁部	胴部		
3	壺	8.6	12.6	14.7	口縁部：タチミガキ 胴部上平：タチミガキ 胴部下平：ヨコミガキ	口縁部：黒色処理・ヨコミガキ	胴部：ナデ		
4	坏	16.0		5.5	ヨコミガキ	黒色処理・ヨコミガキ			
5	坏	13.2		4.9	ヨコミガキ				
6	坏	14.0		4.9	ヨコミガキ				
7	瓶	18.0	17.1	4.0	10.5	口縁部：ヨコナデ 胴部：ナデ	底透穿孔		
8	高坏				8.7	タチミガキ			
9	壺				3.0	ロクロナデ	ヘラケズリ		
10	瓶	11.3			2.7	ロクロナデ	4本単位縞線波状文		
11	壺			5.8	3.4	タチミガキ			
12					2.7	タチミガキ	底部：3.0cm~3.6cmの楕円形		
8号住居跡 (第23図)									
1	小瓶	8.0	7.6		6.6	口縁部：ヨコナデ 胴部：ナデ		ナデ	
2	壺		13.8	6.1	6.4	ハケ		ナデ	
3	高坏				11.0	7.5	タチミガキ・ヨコミガキ	ナデ	
9号住居跡 (第25図)									
1	壺	24.0			7.1	ヨコミガキ	有段口縁	ヨコミガキ	
2	钵	12.8	14.4		8.8	ナデ		ナデ	
3	壺	14.9			4.8	ナデ		ナデ	
4	壺	15.6	18.2		18.9	ナデ→ハケ→ヘラケズリ		ハケ	
5	坏	15.4			6.4	ヨコミガキ		ヨコミガキ	
6	小瓶	7.5	6.8		7.5	口縁部：ヨコナデ	ハケ・ナデ	ナデ	
7	壺	18.4			2.8	ロクロナデ		ロクロナデ	
8	高坏	20.4			6.8	タチミガキ		タチミガキ	
9	高坏				4.6	ナデ→ハケ・ヘラケズリ		ハケ→ナデ	
10	高坏				7.2	タチミガキ		ナデ	
11	高坏				5.7	坏部：ヨコミガキ 胴部：タチミガキ		坏部：ヨコミガキ 胴部：ナデ	

第6表 出土遺物観察表④

番号	器種		法		寸法 (cm)		外 面		整 形 ・ 調 整 ・ 文 様		内 面		備 考
	口縁部	胴部	底面	器高	口縁部	胴部	底面	器高	口縁部	胴部	底面	器高	
10号柱形罎 (第27圖)													
1	竈	16.9	23.2	6.0	27.8	口縁部: 面取り	口縁部: ヨコナデ→ヨコミガキ	胴部: タチミガキ	口縁部: ヨコミガキ	胴部: 板ナデ・ナデ			
2	竈	21.2		4.8	口縁部: 面取り	ヨコナデ	有段口縁		ヨコナデ				
3	竈	19.6		6.1	口縁部: 面取り	タチミガキ	有段口縁		ヨコミガキ				
4	竈	14.9	5.4	8.6	胴部: ヨコミガキ	・タチミガキ			ナデ				
5	竈		12.0	7.4	ナデ				ナデ				
6	小型瓦	8.4	8.8	9.3	口縁部: ヨコナデ	胴部: ナデ			ナデ				
7	小型瓦	12.0		5.0	口縁部: ヨコナデ	胴部: ナデ→ハラケズリ			板ナデ				
8	小型瓦	8.4	7.6	5.6	口縁部: ヨコナデ	胴部: ナデ・ハラケズリ			ナデ				
9	罎	13.2	15.6	10.0	口縁部: ヨコナデ	胴部: ハケ			口縁部: ヨコナデ→ハケ	胴部: ナデ			
10	罎	16.6		7.8	口縁部: ヨコナデ				ハケ				
11	罎	13.7	13.1	5.5	17.1	ナデ	底部に窪み		ナデ				
12	罎	16.4		10.7	ナデ	板ナデ			ナデ→ハラケズリ				
13	罎			9.0	タチミガキ	・ハケ・ナデ			ハケ・ナデ				
14	罎			7.6	ナデ	・ハケ			ナデ				
15	罎			5.4	7.4	ハケ			ハケ→ナデ				
16	瓶	25.8	22.9	10.0	32.1	口縁部: 面取り	口縁部: ハケ→ハラケズリ	胴部: ハケ→ハラケズリ	ハケ・ナデ	胴部上半: ハケ→タチミガキ			
17	鉢	12.6		6.2	7.2	ナデ			ナデ				
18	杯	12.4		5.4	ヨコミガキ				黒色焼酎・ヨコミガキ				
19	杯	16.0		4.6	ヨコミガキ				黒色焼酎・ヨコミガキ				
20	罎	14.0		3.5	口縁部: ナデ				口縁部: ナデ				
21	高杯	13.0		4.6	ヨコミガキ				ヨコミガキ				
22	高杯	17.0		15.0	口縁部: ヨコナデ	胴部: ハケ			杯部: ヨコミガキ	胴部: ナデ			
23	高杯	17.5		5.2	ヨコミガキ				ヨコミガキ				
24	高杯	17.6		3.8	ナデ				ヨコミガキ				
25	高杯			4.2	ヨコミガキ				ヨコミガキ				
26	高杯	20.0		5.9	ヨコミガキ				ヨコミガキ				

第7表 出土遺物観察表⑤

番	器種	法		量 (cm)	整形・調整・文様		内面	備考
		口縁部	胴部		外面	底面		
27	高坏			106	76	ナテ		ナテ
28	高坏			93	65	ナテミガキ・ヨコミガキ		ナテ
29	高坏				80	ナテ・ハケ		ナテ
30	高坏				79	ナテミガキ・ヨコミガキ		ナテ
11号住居跡(竪29回・竪30回)								
1	壺	238			73	ヨコミガキ 有段口縁		ヨコミガキ
2	壺	192	204		150	ハケ		ナテ・ハケ
3	壺	140			88	ハケ		ハケ→ナテ
4	壺	160			54	ナテ		ナテ・ハケ
5	壺	218			67	ハケ→ナテ		口縁部:ナテ→ヨコミガキ 胴部:ナテ
6	壺	92	104		46	ヨコミガキ		口縁部:ナテ→ヨコミガキ 胴部:ハケ
7	壺	180			87	ナテ		ナテ
8	壺	142	142		46	ナテ		ナテ
9	壺	106	112		133	ハケ・ナテ		ナテ
10	台付壺			112	64	ナテ		ナテ・ハケ
11	鉢	134	127		67	ヨコミガキ		ヨコミガキ
12	鉢	135	131		72	ヨコミガキ		ヨコミガキ
13	鉢	114	119		61	ヨコミガキ		ヨコミガキ
14	碗	132	112		116	ナテ・ハケ		ナテ
15	碗	135			70	ナテミガキ		ナテミガキ・ナテ
16	小甗	93	99		105	ナテ		ナテ
17	小甗	94	89		101	ナテ		ナテ
18	小甗	100	89		98	ナテ		ナテ
19	小甗	104	93		91	ナテ・ハケ		ナテ
20	小甗				94	ナテ		ナテ
21	小甗				86	ナテ		ナテ
22	小甗				71	ナテ		ナテ

第8表 出土遺物観察表⑥

番号	器種	法		量 (cm)		外 面	形 状・調 整・文 様	内 面	備 考
		口縁部	胴部	底部	器高				
23	赤銅鏡		6.2		5.0	タチミガキ・ナデ		ナデ	
24	小型丸鏡		13.0		8.8	タチミガキ		ナデ	
25	高杯	18.0		11.6	14.1	タチミガキ		杯部：ナデ→タチミガキ 胴部：ナデ	
26	高杯	14.5		10.6	11.5	ナデ 胴部胴部に粘土を貼付		ナデ	
27	高杯	16.2			4.3	ヨコミガキ		ヨコミガキ	
28	高杯	16.8			4.7	ナデ		ヨコミガキ	
29	高杯	17.4			4.7	ナデ		ヨコミガキ	
30	高杯	19.1			4.9	ハケ→ナデ		ハケ→ナデ	
31	高杯	25.7			8.9	ナデ→タチミガキ		ナデ→タチミガキ	
32	高杯	19.1			5.8	タチミガキ		タチミガキ	
33	高杯	19.4			6.0	タチミガキ		タチミガキ	
34	高杯	19.4			5.8	タチミガキ・ヨコミガキ		ヨコミガキ	
35	高杯	19.8			4.8	タチミガキ		タチミガキ	
36	高杯	18.1			4.2	ヨコミガキ		ヨコミガキ	
37	高杯	16.6			4.5	器面荒れ		器面荒れ	
38	高杯	17.6			6.3	タチミガキ・ヨコミガキ		ナデ→タチミガキ	
39	高杯			13.6	8.9	ナデ		ナデ・ハケケズリ	
40	高杯			11.6	9.2	ナデ		ナデ	
41	高杯			11.8	9.6	タチミガキ		杯部：ヨコミガキ 胴部：ナデ・ハケケズリ	
42	高杯			11.2	9.5	タチミガキ・ヨコミガキ		ナデ	
43	高杯			12.0	8.6	タチミガキ・ヨコミガキ		ナデ	
44	高杯			12.0	8.3	ナデ		ナデ	
45	高杯			11.4	7.3	ナデ		ナデ・ハケケズリ	
46	高杯			13.0	3.7	タチミガキ 右段脚		ナデ	
13号住居跡 (第32図)									
1	葺	17.2			5.0	右段口縁	ヨコナデ→軽いミガキ	ヨコナデ→軽いミガキ	
2	葺	15.8			5.9	右段口縁	ヨコナデ→軽いミガキ	ヨコナデ→軽いミガキ	

第9表 出土遺物観察表⑦

番号	器種		法		寸法 (cm)		整形・調整・文様			備考
	口縁部	胴部	底値	器高	外面	内面				
3	甕	17.0	20.8	19.3	11線部：ヨコナデ 胴部：ハケ				ナデ・ハケ	
4	甕	17.0		5.8	口縁部：ヨコナデ 胴部：ナデ				ナデ	
5	甕			6.8	ナデ				ナデ	
6	鉢	12.0		13.0	14.0	ミガキ			黒色処理・ミガキ	
7	小型瓦甕	8.8	8.4	8.4	ナデ				ナデ	
8	小型瓦甕	10.0	9.4	7.6	ナデ	ヘラケズリ			ナデ	
9	小型瓦甕	9.4	9.0	9.2	ハケ→ナデ	ヘラケズリ			ナデ	
10	小型瓦甕			3.8	ナデ				ナデ・ハケ	
11	鉢	11.9		5.4	ヨコミガキ				黒色処理・ヨコミガキ	
12	甕	15.0		4.1	口コナデ・ヘラケズリ				口コナデ	
13	高坏	21.2		4.2	ナデ				ヨコミガキ	
14	高坏	16.8		4.1	ナデ→軽いミガキ				ヨコミガキ	
15	高坏	12.9		7.4	坏部：ヨコミガキ 胴部：ナデミガキ				坏部：黒色処理・ヨコミガキ 胴部：ナデ	
16	高坏			9.6	ナデミガキ				坏部：黒色処理・ミガキ	
17	高坏				坏部に線刻				ミガキ	
17号住居跡 (第34段)										
1	甕	11.8		4.4	ナデ				ヨコミガキ	
2	甕	19.0		4.9	ナデ・ハケ				ナデ	
3	高坏	18.1		12.9	坏部：ヨコミガキ 胴部：ナデミガキ				坏部：ヨコミガキ 胴部：ナデ	
4	高坏	16.2		3.9	ナデミガキ				ヨコミガキ	
18号住居跡 (第36段)										
1	高坏	16.8		8.0	ナデミガキ・ヨコミガキ				黒色処理・ヨコミガキ	
2	鉢	18.0	16.2	8.0	ナデミガキ				黒色処理・ヨコミガキ・ナデミガキ	
3	坏	12.0		3.8	ヨコミガキ				黒色処理・ヨコミガキ 放射状暗文	
4	坏	12.4		3.8	ヨコミガキ				黒色処理・ヨコミガキ	
44号住居跡 (第38段)										
1	甕	13.9		6.0	ヨコミガキ・ナデミガキ 有段口縁				ヨコミガキ・ナデ	

第10表 出土遺物観察表⑧

番号	法		量 (cm)		器高	器底	器口	断面	外形	調整	文様	内面	備考
	器種	口縁部	胴部	底部									
2	壺	11.6		74	ナナ一軽いタチミガキ							ナデ	
3	小壺	69	90	73	ハナ一ナデ							ナデ	
4	坏	129		61	ヨコミガキ							ヨコミガキ	
46号住居跡 (第40図)													
1	壺	27.8	30.4		11.7	ハナ一軽いミガキ						ハナ一軽いミガキ	
2	壺	17.6			8.0	ナデ						ナデ	
3	壺	15.8			4.9	ナデ一ハナ						ナデ	
4	鉢	8.6	9.0		3.8	ヨコミガキ						ヨコミガキ	
5	鉢	15.2	13.9		7.2	ヨコミガキ						ヨコミガキ	
6	鉢	18.6			6.2	ヨコミガキ						黒色処理・ヨコミガキ	
7	坏	14.4			5.2	ヨコミガキ						ヨコミガキ	
8	壺				6.8	ナデ	底部に窪み					ナデ	
9	高坏	18.7			12.8	タチミガキ						坏部：黒色処理・ヨコミガキ	胴部：ナデ
10	高坏	15.0			9.8	10.8	タチミガキ					坏部：ヨコミガキ・タチミガキ	胴部：ナデ
11	高坏	17.2			7.2	ヨコミガキ						ヨコミガキ	
12	高坏	18.8			5.5	ナデ						黒色処理・ヨコミガキ	
13	高坏				12.2	7.9	タチミガキ					ナデ	
49号住居跡 (第41図)													
1	壺		13.2		8.4	ナデ一軽いミガキ						ナデ	
50号住居跡 (第42図)													
1	壺	23.0	23.0		8.9	ヨコミガキ						ナデ一ヨコミガキ	
2	壺	18.6	17.8		6.8	ナデ						ナデ	
3	壺	20.4			4.7	ナデ一タチミガキ						ナデ一ヨコミガキ	
4	壺	16.4			4.9	ナデ						ナデ	
5	坏	10.1			4.8	4.7	ナデ一ハナケズリ					黒色処理・ヨコミガキ	
6	高坏				16.1	1.8	横ミガキ	有段脚				ナデ	

第11表 出土遺物観察表⑨

番号	器種	法 量 (cm)		整 形 ・ 調 整 ・ 文 様	内 面	備 考
		口縁部	底部			
51号住居跡 (第44図)						
1	甕	15.6	17.2	ナテ		ナテ・板ナテ
2	坏	14.1		ヨコミガキ		黒色地肌・ヨコミガキ
3	壺			口縁部：ナテ・ハケケズリ		口縁部：ナテ
4	壺		6.6	ナテミガキ		ナテ・黒いヨコミガキ
52号住居跡 (第46図)						
1	甕	16.2	21.4	3.0	24.1	ハケ 底部：ハケケズリ
2	鉢	14.7	11.9	3.3		ナテ→ハケ
3	壺	10.8	13.9	10.5		口縁部：ナテミガキ 胴部：ヨコミガキ
53号住居跡 (第48図)						
1	甕	15.2	26.2	4.8	31.0	口縁部：ヨコミガキ 右段口縁 胴部：ナテミガキ
2	鉢	10.8	12.0		5.4	ナテ
3	甕	20.2	25.8		14.9	ハケ・ナテ
4	鉢	14.0	14.4		9.7	ナテ
5	鉢	16.0	14.7		7.8	ヨコミガキ
6	鉢	13.9	16.5		14.6	ナテ
7	坏	12.0			4.6	ナテ・ハケ
8	甕	19.4		4.8	10.5	ナテ 底部：穿孔
9	高坏				8.3	ナテミガキ
10	高坏		18.8		4.2	ナテ・ナテミガキ
55号住居跡 (第51図)						
1	甕	15.0				板ナテ
2	鉢	12.4			6.0	ヨコミガキ
3	坏				5.1	ヨコミガキ
4	坏	12.2			4.3	ヨコミガキ
56号住居跡 (第52図)						
1	甕	22.8			12.4	ナテ

第12表 出土遺物観察表⑩

番号	器種	法		量 (cm)	形状・調製・文様		備考	
		口縁部	胴部		底部	器高		外面
2	甕	23.0		15.5	ナデ・ハケ		ナデ	
3	鉢	13.2	12.8	8.6	ナデ	底部付足：ヘラケズリ	ナデ	
4	高坏		14.2	7.1	タチミガキ		ナデ・ヘラケズリ	
57号住居跡(第54図)								
1	甕	17.0		7.3	ナデ		ナデ	
2	小瓶足	8.5	8.6	8.2	ナデ		ナデ	
3	小瓶足	8.8	9.4	9.2	ナデ・ハケ		ナデ	
4	小瓶足	10.5	9.8	10.6	ナデ		ナデ	
9号溝跡(第55図)								
1	甕	10.8	11.4	12.7	ナデ→ハケ→轆い	タチミガキ	ナデ・板ナデ	
12号住居跡(第57図)								
1	坏	17.2		8.4	ロクロナデ	底部付近ヘラケズリ	底部：ヘラケズリ	
2	坏	16.7		4.2	ロクロナデ		黒色処理・ミガキ	
3	坏	16.1		5.4	ロクロナデ		黒色処理・ミガキ	
4	坏	14.3		5.5	4.2	ロクロナデ	底部付近ヘラケズリ	底部：黒色処理・ミガキ
5	甕	20.4	21.8	5.0	28.2	ナデ・ヘラケズリ	ナデ・板ナデ	
6	甕	30.6	30.4	20.4	20.4	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ・板ナデ	
7	甕		11.8	12.4	タタキ		ナデ	
8	甕	21.9		25.0	17.7	ナデ・ハケ	ハケ	
22号住居跡(第61図)								
1	坏	15.9		2.8	ロクロナデ		ロクロナデ	
2	坏	14.5		2.6	ロクロナデ		ロクロナデ	
3	坏	12.8		2.6	ロクロナデ		ロクロナデ	
4	坏	12.6		4.2	ロクロナデ		ロクロナデ	
5	甕	21.2	19.9	8.0	37.5	ナデ→ハケ	底部：木炭灰	
6	甕	23.4		7.9	タチミガキ		ヨコミガキ	

第13表 出土遺物観察表①

番号	器種	法 量 (cm)		外 面	文 様	内 面	備 考
		口縁部	胴部				
23号住居跡 (第63回)							
1	1 坏	133	71	3.8	口タロナデ 底部：糸切り		口タロナデ
2	2 坏	132	78	3.6	口タロナデ 底部：糸切り		口タロナデ
3	3 坏	124	70	3.0	口タロナデ 底部：糸切り		口タロナデ
4	4 坏	126	24	2.4	口タロナデ 胴部		口タロナデ 蓋着上段
24号住居跡 (第65回)							
1	1 坏	128	64	3.4	口タロナデ 底部：糸切り		口タロナデ
2	2 坏	134	72	3.3	口タロナデ 底部付近：ヘラケズリ 底部：ヘラ切り		黒色焼酎・ミガキ
3	3 坏	138	58	5.1	口タロナデ 底部付近：ヘラケズリ 底部：ヘラ切り		黒色焼酎・ミガキ
4	4 坏	152	46	4.6	口タロナデ		黒色焼酎・ミガキ
5	5 坏	156	60	6.1	口タロナデ 底部付近：ヘラケズリ 底部：ヘラ切り		黒色焼酎・ミガキ
6	6 坏	144	63	4.5	口タロナデ 底部付近：ヘラケズリ 底部：ヘラ切り		黒色焼酎・ミガキ
7	7 坏	148	76	5.7	口タロナデ 底部付近：ヘラケズリ 底部：ヘラ切り		黒色焼酎・ミガキ
8	8 壺	230	252	14.7	口タロナデ		口タロナデ・カキメ
9	9 坏	120	60	3.9	口タロナデ 底部：糸切り		口タロナデ
10	10 坏	124	56	3.3	口タロナデ 底部：糸切り		口タロナデ
11	11 坏	126	60	3.3	口タロナデ 底部：糸切り		口タロナデ
12	12 坏	124	52	4.1	口タロナデ 底部：糸切り		口タロナデ
13	13 坏	132	62	4.2	口タロナデ 底部：糸切り		口タロナデ
14	14 壺	134	142	3.9	口タロナデ		口タロナデ
25号住居跡 (第67回)							
1	1 坏	156	48	4.8	口タロナデ		黒色焼酎・ミガキ
2	2 坏	125	61	3.3	口タロナデ 底部：糸切り		口タロナデ
3	3 坏	136	32	3.2	口タロナデ		口タロナデ
4	4 坏	126	34	3.4	口タロナデ		口タロナデ
5	5 壺	244	71	7.1	口タロナデ		口タロナデ

第14表 出土遺物観察表②

番号	器種	法		高さ	整形・調整・文様	内面	備考
		上縁部	胴部				
29号住居跡(第71図)							
1	杯	14.4	6.0	5.2	ロクロナデ 底部付近：ヘラケズリ 底部：ヘラ切り	黒色焼酎・ミガキ	
2	杯	13.6		3.6	ロクロナデ	黒色焼酎・ミガキ	
3	杯	12.2	7.0	3.7	ロクロナデ	ロクロナデ	
4	甕	22.8	22.8	10.8	ロクロナデ	ロクロナデ	
30号住居跡(第73図)							
1	甕	22.0		5.1	ナデ・ハケ	ナデ	
2	杯	12.6		2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	
31号住居跡(第75図)							
1	杯	12.3	10.2	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	
2	甕	16.4		2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	
3	甕	21.5		3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
32号住居跡(第77図)							
1	杯	14.0	7.3	4.8	ロクロナデ 底部：ヘラケズリ	黒色焼酎・ミガキ	
2	杯	14.6	7.8	5.1	ロクロナデ 底部：ヘラケズリ→ナデ	黒色焼酎・ミガキ	
3	甕		9.0	2.1	ロクロナデ	ロクロナデ	灰釉陶器
4	甕	23.6	21.8	16.3	ロクロナデ	ロクロナデ	
5	鉢	19.0	21.4	9.8	13.1	ロクロナデ 底部付近：ヘラケズリ 底部：糸切り→ヘラケズリ	ロクロナデ・ガキメ
6	甕	13.6		1.7	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
7	甕	14.0		1.5	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
33号住居跡(第79図)							
1	杯	13.6	6.0	4.2	ロクロナデ 底部：ヘラ切り	黒色焼酎・ミガキ	
2	杯	13.1	6.5	3.6	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	No1-1
3	杯	14.0	7.0	4.0	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	No1-2
4	杯	13.0	5.2	4.1	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	No3
5	杯	14.1	5.3	4.6	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	No5
6	杯	13.0	6.0	3.9	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	No6

第15表 出土遺物観察表⑬

番 号	器種	法 量 (cm)		整 形 ・ 調 整 ・ 文 様			備 考	
		口縁部	胴部	底部	器高	外 面		内 面
7	環	130		56	35	口クロナデ	口クロナデ	No7
8	環	138		63	44	口クロナデ 底部：糸切り	口クロナデ	No8
9	環	129		64	36	口クロナデ 底部：糸切り	口クロナデ	No9
10	環	132		65	39	口クロナデ 底部：糸切り	口クロナデ	
11	環	122		59	39	口クロナデ 底部：糸切り	口クロナデ	
12	環	136		78	37	口クロナデ 底部：糸切り 墨書「主」	口クロナデ	墨書上器
13	環	136		60	34	口クロナデ 底部：糸切り	口クロナデ	
14	環	136		84	37	口クロナデ 底部：糸切り	口クロナデ	
15	環	142		33		口クロナデ	口クロナデ	
16	壺	246	272	129		口クロナデ	口クロナデ・カキメ	
17	変	195	222	38	29.3	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	
18	鉢	130	57	76		口クロナデ 底部：糸切り	口クロナデ	No4
19	鉢	126	130	62	11.4	口クロナデ 底部：糸切り	口クロナデ	
34号住居跡 (第81図)								
1	環	130			21	口クロナデ	口クロナデ	
2	環	123			3.3	口クロナデ	口クロナデ	
3	蓋	170			26	口クロナデ	口クロナデ	
36号住居跡 (第83図)								
1	環	130			47	口クロナデ 底部：ヘラ切り→ナデ?	口クロナデ	
2	環	120			31	口クロナデ	口クロナデ	
3	環				30	口クロナデ	口クロナデ	
4	変	208			79	ナデ	ナデ	
5	蓋			119	18	口クロナデ	口クロナデ	
37号住居跡 (第85図)								
1	環	138		67	43	口クロナデ	口クロナデ	
2	環	134		58	43	口クロナデ 底部：ヘラケズリ	口クロナデ	
3	環	126		55	38	口クロナデ 底部：ヘラケズリ	口クロナデ	

第16表 出土遺物調査表④

寄附者	法 庫 (cm)		外 面		内 面	備 考
	山陰部 朝飯	器高	底 部	底 部		
4 坏	127	6.5	4.2	ロクロナデ 底部：ヘラケズリ	ロクロナデ	
5 坏	124	5.5	3.9	ロクロナデ 底部：ヘラケズリ	ロクロナデ	
6 坏	128	5.6	3.6	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	
7 坏	129	3.4	3.4	ロクロナデ 底部付近：ヘラケズリ	ロクロナデ	
8 坏	132	3.0	3.0	ロクロナデ 底部付近：ヘラケズリ	ロクロナデ	
9 坏	179	4.7	4.7	ロクロナデ	ロクロナデ	
10 鉢	88	10.5	5.6	4.9	ロクロナデ 底部付近：ヘラケズリ	ロクロナデ 縦状工具による深いカキメ
11 甕	258	12.1	12.1	ロクロナデ・タタキ	ロクロナデ	
12 甕	184	19.9	6.6	ロクロナデ	ロクロナデ	
13 甕	146	3.2	3.2	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
14 甕	140	2.3	2.3	ロクロナデ・ヘラケズリ	ロクロナデ	
15 甕	16.1	2.8	2.8	ロクロナデ	ロクロナデ	
58号住居跡 (第86区)						
1 甕	190	24.0	8.4	26.2	ナデ→ヘラケズリ 底部：ハケ	ナデ・ハケ
59号住居跡 (第88区)						
1 坏	137	7.7	3.7	ロクロナデ 底部付近：ヘラケズリ	ロクロナデ	
2 坏	135	3.5	3.5	ロクロナデ	ロクロナデ	
3 坏	130	2.7	2.7	ロクロナデ	ロクロナデ	
4 甕	131	4	3.2	ロクロナデ	ロクロナデ	
40号住居跡 (第90区)						
1 坏	131	7.0	4.2	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	
2 坏	129	7.1	4.0	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	
3 坏	11.6	6.2	4.1	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	
4 坏	128	6.0	3.6	ロクロナデ 底部：糸切り	ロクロナデ	
5 坏	128	4.0	4.0	ロクロナデ	ロクロナデ	
6 坏	84	5.4	4.1	ロクロナデ	ロクロナデ	
7 甕	21.2	22.9	11.9	ナデ・ヘラケズリ	ナデ	

第17表 出土遺物観察表⑤

番 号	器 種	法 量 (cm)		外 面	整 形 ・ 調 整 ・ 文 様	内 面	備 考
		口縁部	胴部				
43号住居跡 (第92図)							
1	杯	154	62	ロクロナデ 底部付近：ハラケズリ	底部：ハラケズリ		黒色灰質・ミガキ
2	杯	146	65	ロクロナデ 底部付近：ハラケズリ	底部：ハラケズリ		黒色灰質・ミガキ
3	杯	128	55	ロクロナデ 底部：糸切り			黒色灰質・ミガキ
4	杯	126	56	ロクロナデ 底部付近：ハラケズリ	底部：ハラケズリ		ミガキ
5	皿	123	59	黒色灰質・ミガキ			黒色灰質・ミガキ
6	甕	248	252	ロクロナデ・ハラケズリ			ロクロナデ・椀ナデ
7	甕	230	238	ロクロナデ・ハラケズリ			ロクロナデ・カキス
8	甕	234	228	ロクロナデ・ハラケズリ			ロクロナデ・ハケ
9	甕	246	176	ロクロナデ・ハラケズリ			ロクロナデ
47号住居跡 (第94図)							
1	杯	138	35	ロクロナデ			ロクロナデ
2	甕	180	224	ナデ			ナデ
3	甕	173	280	ロクロナデ・タタキ			ロクロナデ
48号住居跡 (第95図)							
1	杯	136	24	ロクロナデ			ロクロナデ
2	杯	144	106	ロクロナデ			ロクロナデ
3	甕	163	30	ロクロナデ			ロクロナデ
16号土坑 (第96図)							
1	杯	131	98	ロクロナデ 底部：糸切り→ハラケズリ			ロクロナデ
2	杯	136	70	ロクロナデ 底部：糸切り			ロクロナデ
3	杯	123	32	ロクロナデ			ロクロナデ
35号土坑 (第98図)							
4	杯	132	36	ロクロナデ			ロクロナデ
48号土坑 (第98図)							
5	杯	139	62	ロクロナデ 底部：糸切り			ロクロナデ

第18表 出土遺物観察表⑮

番号	法 墓 (cm)		整 形 ・ 調 整 ・ 文 様		備 考
	口縁部	胴部	外 面	内 面	
62号土坑 (第98回)					
6 坏 124	5.3	3.9	口クロナデ 底部：糸切り	口クロナデ	
42号土坑 (第99回)					
1 罎 120		5.4	口クロナデ 頸輪 底部付近：ハラケズリ	口クロナデ 施輪	天目茶碗
遺構外 (第101回)					
1 壺 88			6.3 縄文・沈線 口縁部：ヨコナデ	ナデ	
2 壺			4.9 頸部：沈線文 縄文花柄 刺突	ナデ	
3 甕 102			6.7 5本単位・櫛形口状文 櫛形直線文	ナデ→横いミガキ	
4 甕			3本単位・櫛形直線文	ナデ	
5 甗			沈線文・縄文・櫛形直線文	ナデ	
6 甗			沈線文・櫛形直線文・櫛形刺突文	ナデ	
7 甗			沈線・刺突・縄文	ナデ・ハラケ	
8 甗			櫛形文	ヨコナデ→ミガキ	
9 甗			口縁部：縄文 口縁部：縄文 頸部：櫛形直線文	ヨコナデ	
10 甗			櫛形文	ミガキ	
11 甗			櫛形直線文による区画 櫛形直線文	ミガキ	
12 甗			櫛形文・刺突	ミガキ	
13 甗 208			5.3 ヨコミガキ・タ子ミガキ 有段口縁	ヨコミガキ	
14 甗 178 238			17.9 ナデ→横いミガキ 有段口縁	ナデ	
15 甗 174			6.7 ナデ	ナデ	
16 甗 164			6.2 ナデ	ナデ	
17 甗 11.4			ナデ・ハラケ	ナデ	
18 坏 138			5.5 ヨコミガキ・ハラケズリ	ヨコミガキ	
19 坏 150			5.4 ヨコミガキ	ヨコミガキ	
20 坏 132			4.7 ヨコミガキ	ヨコミガキ	
21 坏 11.4			4.2 ヨコミガキ	ヨコミガキ	
22 甗 21.2			4.5 口クロナデ	口クロナデ	

第19表 出土遺物観察表⑩

背 号	器種	法 量 (cm)			外 面	形 形・調 整・文 様	内 面	備 考	
		口縁部	胴部	器高					
23	小形鉢	7.4	9.2		ナテ・ヘラケズリ		ナテ		
24	小形鉢	7.8	7.6		ナテ		ナテ		
25	小形鉢	8.7	8.8		ナテ・ハケ		ナテ		
26	小形鉢		7.8		ナテ		ナテ		
27	甌		7.4	10.0	ナテ→ミガキ 底部穿孔		ナテ→ミガキ		
28	高坏	19.8		6.4	タテミガキ		タテミガキ		
29	高坏	18.0		4.8	ヨコミガキ		ヨコミガキ		
30	高坏	13.6		5.2	ナテ		ナテ		
31	高坏		11.6	9.5	タテミガキ		ナテ		
32	高坏		12.4	6.9	タテミガキ		ナテ		
33	坏	12.2		6.0	4.2	ロクロナテ 底部：糸切り	ロクロナテ		
34	坏	12.0		5.4	3.6	ロクロナテ 底部：ヘラ切り	黒色灰埴・ミガキ		
35	坏	16.2		6.6	5.7	ロクロナテ 底部付込：ヘラケズリ 底部：ヘラ切り 明書	黒色灰埴・ミガキ		
36	皿	11.9		5.8	2.3	黒色灰埴・ミガキ	黒色灰埴・ミガキ	黒書土器	
37	坏	12.5		5.6	4.4	ロクロナテ 底部：糸切り	ロクロナテ		
38	坏	13.3		5.2	4.5	ロクロナテ 底部：糸切り	ロクロナテ		
39	坏	13.2		6.2	4.0	ロクロナテ 底部：糸切り	ロクロナテ		
40	坏	13.0		6.2	3.8	ロクロナテ 底部：糸切り	ロクロナテ		
41	坏	11.4		6.2	3.6	ロクロナテ 底部：糸切り	ロクロナテ		
42	坏	14.0		6.0	3.5	ロクロナテ 底部：ヘラケズリ	ロクロナテ		
43	坏	11.6		5.1	3.4	ロクロナテ 底部：糸切り	ロクロナテ		
44	坏	11.6		9.6	3.2	ロクロナテ	ロクロナテ		
45	甌	17.4		3.9		ロクロナテ・ヘラケズリ	ロクロナテ		
46	甌	25.0		10.7		ロクロナテ	ロクロナテ		
47	甌		18.0	10.8		14.8	ロクロナテ		
48	甌			10.4		4.5	ロクロナテ→ヘラケズリ	ロクロナテ	

第4章 まとめ

今回の調査は、屋代遺跡群城ノ内遺跡の中央部分を南北に走る現道の幅部分約1,100mを調査したもので、城ノ内遺跡で実施された単独の調査としては最大の面積となった。

検出遺構は弥生時代から中世まで幅広く、竪穴住居跡53棟（弥生1、古墳26、奈良・平安26）、掘立柱建物跡2棟（奈良・平安）、土坑68基（弥生1、古墳7、奈良・平安19、中世41）、溝跡15基（古墳6、奈良・平安4、中世5）、ピット46基（時期不明）と、多くの遺構が密集して検出され、特に古墳時代から平安時代にかけては、周辺の遺跡の調査事例も含め、規模の大きな集落が形成されていたことが改めて確認できた。

城ノ内遺跡は、開発行為に伴う記録保存目的あるいは学術調査として多くの発掘調査が実施されているが、いずれも断片的に調査されたものであるため、城ノ内遺跡の全体像を把握できるほどの面積の調査を実施できているわけではない。しかし、隣接する大境遺跡や荒井遺跡、松ヶ崎遺跡などでも多くの遺構が確認されているように、各時代、広範囲にわたって連続と集落が築かれ続けていたことが判明していることから、ここでは、各時代の遺構や遺物を周辺遺跡の状況も踏まえ概観するとともに、今回の調査で判明した東京教育大学の城ノ内遺跡発掘調査地点について触れ、まとめたい。

1 弥生時代

弥生時代の遺物は城ノ内遺跡内のいたるところから出土するものの、遺構として確認できているものは非常に少ない。出土遺物の様相から遅くとも弥生時代中期には居住域として定着するようで、城ノ内遺跡から荒井遺跡北部付近にかけて集中する傾向が今のところみられ、中期初頭から中期前半の遺物も比較的多く出土している。

竪穴住居出土資料は栗林式土器の中でも古い段階に属するものが多く、今回検出された1号住居跡出土資料（第10図）も古い様相を呈する。

71号土坑（註1）出土資料（第12図）は、器形や文様構成から栗林式土器とすることに多少の違和感を覚えるが、壺におけるハケ整形と甕への欄描文採用など、栗林式土器の指標となる要素がとり込まれていることから、現段階では栗林式土器の範疇として理解しておく。

弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構は城ノ内遺跡では確認されておらず、その中心は町浦遺跡や灰塚遺跡、生仁遺跡など、屋代遺跡群内でも東側一帯に展開しているものとみられる。

2 古墳時代

再び集落を築き始めるのは5世紀になってからとなる。5世紀から6世紀にかけての遺構は隣接する大境遺跡でも確認することができ、町浦遺跡でも4世紀以降継続して集落が営まれていることから、この時期に集落が拡大している。

11号住居跡は一辺約8mを測り、出土遺物の様相から5世紀前半を想定している。通常5m前後を測る同時期の住居と比較すると突出して大きな住居となることから、集落の中心的な役割を果たす住居（施設）と考えられ、床面から僅かに浮いた位置から多量の土器片とともに勾玉や管玉、白玉（第30図47～49）など玉製品も出土している。土器は破片となって出土しているものが多く、特に高坏は坏部と脚部とが接合するものが少ないため、意図的に破却し住居内に廃棄している可能性もある。

古墳時代の遺構は、東1区から東2区にかけてと、西2区と西3区など調査区北半に集中しており、東3区や西1区など調査区南半では古墳時代の堅穴住居跡は皆無となる。

3 奈良・平安時代

集落規模は7世紀に一旦縮小するものの、8世紀に入るとまた徐々に数を増し、9世紀には再び大集落を形成するようになる。

上信越自動車道建設工事や国道403号土口バイパス建設工事に伴う町浦遺跡での発掘調査では多くの掘立柱建物跡が確認されており、国府木簡や郡府木簡など特殊遺物の出土から、周辺に古代官衙の存在が想定されている。時期的には7世紀末から8世紀前半が当てられているが、屋代遺跡群では当該期遺構が減少期となることから集落形成に不明な点が多い。

9世紀に入ると集落は飛躍的な拡大をみせ、屋代遺跡群内のどの地点でも普遍的に検出することができる。その背景には埴科郡衙としての行政機能が当該地にあり、多くの集落（ムラ）が周辺に築かれたものと推測する。それぞれの集落単位を明確にすることはできていないが、数十棟を一つの単位とする集落がいくつも点在していたことがうかがえる。

仁和4（888）年に千曲川流域の居住域や水田域などを飲み込む大洪水が発生しており、大境遺跡や荒井遺跡などでこの洪水に伴うとみられる砂質土を確認することができる。

城内遺跡でも少なからずその被害を受けたものと思われるが、西1区に僅か数cmの薄い洪水砂層の堆積が認められる程度で、この砂質土を覆土とする遺構は検出されていない。

この洪水の影響からか、屋代遺跡群は居住地としての機能を著しく低下させた地域となるようで、10世紀代の遺構はほとんど検出できなくなり、その後再び居住域として開拓され、定着し始めるのは11世紀以降になってからとなる。

4 中世

幅4m以上を測り、深さが2mを超える規模の大きな溝跡が、城内遺跡のいたるところで確認されている。断片的な調査によるものではあるがその様相から居館の堀跡を想定しており、堀跡内部から出土する遺物の様相により概ね13世紀初頭以降の遺構となる。今回調査でも居館堀跡とみられる溝跡が2基（3号・12号）検出されており、周辺調査での溝跡と符合する可能性が高い。

調査区全域にわたって検出されている直径1m前後の円形土坑は、覆土が暗灰色の粗い砂質土を呈するものと明灰黄色粘質土を呈するものがあり、中世遺構として認識した土坑41基の内、22基がこの様相に属する土坑である。この22基の円形土坑については、遺構確認面から1m以上を掘削しても底面が確認できず、また、円柱状に掘られるその様相から井戸跡を想定しており、城内遺跡のほか周辺の遺跡でも検出されている遺構である。内部から遺物が出土する例はあまりなく時代を断定することが難しいが、42号土坑から天目茶碗が出土しているほか、いくつかの土坑から内耳鍋やカワラケ、陶磁器の破片が出土しており、古墳時代や平安時代の遺構を破壊して構築されていることから当該地では最も新しい時代の遺構の一つとなる。居館堀跡が検出される周辺に多く確認できるため居館との関連も考えられるが、今後検討が必要な遺構の一つと言える。

このほか、覆土は黒褐色シルト質土を呈し、長方形や不整形の平面形をもつ土坑も確認されている。深さは20～30cmを測り、24号土坑から開元通宝、26号土坑から皇宋通宝、28号土坑から至和元宝の、いずれも北宋銭が1枚ずつ出土している。当初、墓跡を想定したが骨片や副葬物など墓跡を確認できる遺物の出土はなく、用途不明な遺構である。

5 城ノ内遺跡周辺の遺構分布状況

今回の調査地周辺では、過去数度にわたる発掘調査が実施されてきており、検出された遺構は膨大な数に及んでいるが、遺跡全体からすれば僅かな面積が調査されたに過ぎず全容解明に十分な内容とは言えない。しかしながら、これまでの調査成果により各時代の集落形成の傾向を捉えることができつつあることから、ここでは各時代の遺構分布状況を概観してみたい。

第102図は、城ノ内遺跡に荒井遺跡、大境遺跡、松ヶ崎遺跡を含めた遺構分布状況である。各調査とも竪穴住居跡を中心に出土遺物や重複関係などで時代を特定できた遺構、あるいはその時代を特徴づける遺構のみを抽出した。本来であれば各時代の時期差を考慮した分類も必要となるが、それぞれの時代の集落形成を識別することに主眼を置いたため、細かな時期差による区別はおこなわなかった。**弥生時代** 検出された遺構の大半が中期の遺構で、城ノ内遺跡と荒井遺跡、大境遺跡で計十数棟が検出されている。後の時代の構築物に破壊されていることも考えられるが、竪穴住居跡は点々としており、どういった規模で集落を形成したかまでの把握はできていない。

竪穴住居跡以外では土坑や溝跡など小規模遺構が検出されており、特に、長野県埋蔵文化財センターが実施した国道403号土口バイパス調査地点（以後「**県埋文調査地点**」とする。）では、多くの中期土坑が検出されている。

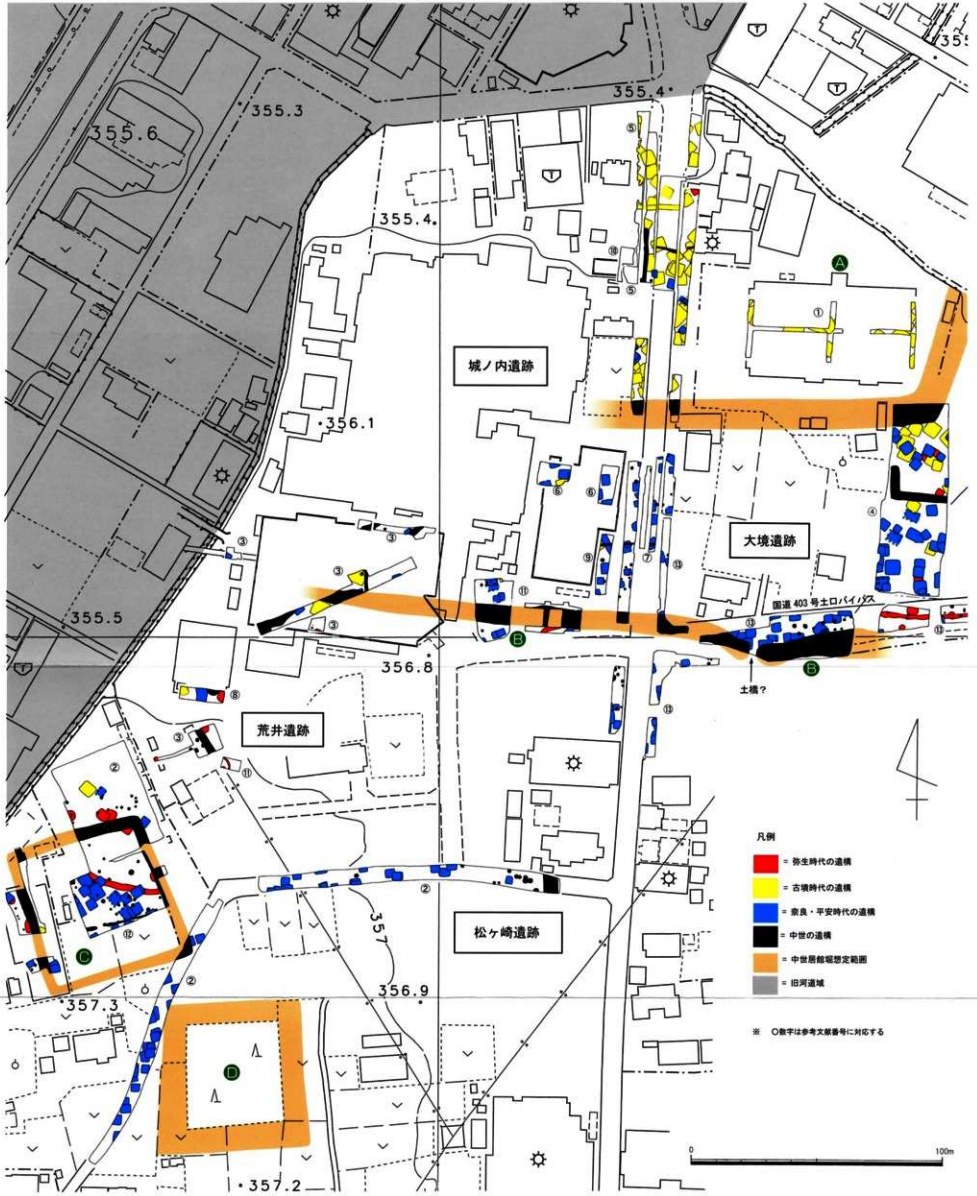
古墳時代 5世紀と6世紀を中心とする遺構が城ノ内遺跡北側から大境遺跡にかけて集中し、また、城ノ内遺跡西端や荒井遺跡など、旧河道縁辺部に沿って数棟の竪穴住居跡が確認されている。この場所は周囲より僅かに高地となることから居住適地として選択されたようであるが、南方への集落の進出はみられず、町浦遺跡などさらに東方へ展開していく。

奈良・平安時代 最も多くの遺構を検出している時代であり、9世紀代の竪穴住居跡が8割近くを占め、残りが7世紀～8世紀の竪穴住居跡となる。10世紀以降の竪穴住居跡は今のところ確認されていない。古墳時代集落が中心となる地域と、奈良・平安時代集落が中心となる地域とが、城ノ内遺跡の中央付近から分かれる状況がみとれる。

中世 大境遺跡で検出された溝跡（註2）は幅10mを超える。明治21年の地籍図にみられる地割を参考にすると、今回調査3号溝跡と同一の溝跡となる可能性が高く、さらに広範囲に展開している様相も考えられることから、大規模居館（㉔）となることが予想される。このほか、県埋文調査地点から今回調査12号溝跡を經由して西側へ直線的に伸びる堀跡（㉕）にみられるように、単に方形区画によるものだけでなく、㉔の周囲を防御する役割を果たす堀の配置がなされていたとも考えられ、これらが一体となった“城館”の様相を推測することができる。

戦国期の地方豪族「屋代氏」の居城は、城ノ内遺跡から2kmほど南の一重山に築かれた屋代城である。15～16世紀の構築とされる屋代城の築城以前に、この城ノ内地籍において居館（屋代古城）が築かれていたとされている。明治21年の地籍図地割や発掘調査成果などから、㉔と㉕の一角がこの屋代古城となる可能性が高いものと言え、県埋文調査地点で土橋を想定し得る幅3mほどの堀の断絶部が検出されている点は非常に興味深い。

荒井遺跡から松ヶ崎遺跡にかけての一角には、地籍図の地割などから3箇所の居館跡（㉖・㉗、ほか）の存在が想定されており、㉖については発掘調査により方形に区画された幅4～5mの溝跡が検出され、地割が示していたとおり約50m四方の居館跡の存在が把握できた唯一の地点となっている。㉗ともう1箇所の居館推定地は、発掘調査による立証はされていない。



6 東京教育大学発掘調査地点の特定

昭和32年から35年の4年間にわたって実施された東京教育大学（現在の筑波大学）による城ノ内遺跡の発掘調査（以後「教育大調査」とする。）は、当時の更埴市において初めておこなわれた本格的な発掘調査であり、同大文学部の木代修一教授と岩崎卓也氏を中心に、東京都や神奈川県などの学校教諭と東京教育大学生のほか、地元小中学校及び高等学校の教諭や生徒の協力を得て実施した学術調査である。調査は夏休み期間中におこなわれ、古墳時代から平安時代の堅穴住居跡19棟をはじめ、溝跡や土坑、祭祀遺構など多くの遺構が検出されている。

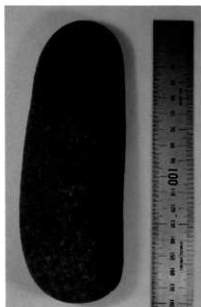
この調査の成果としてまとめられ刊行された報告書『城の内』では、主に堅穴住居跡から出土した土器様相により第1様式から第6様式に編年されるなど、当時、古墳時代の集落研究や土器編年研究の基礎資料として大変重要な調査であったが、報告書に掲載された調査位置図や文章から正確な調査地点を読み解くことができず、城ノ内遺跡内のどの場所を調査したかという、調査地点の特定が長い間できずにいた。

教育大調査地点確認までの経過 城ノ内遺跡は、過去の調査事例等から地表下約1mで遺構確認面としての黄褐色シルト質土が検出され、この上部に暗褐色を呈するシルト質の遺物包含層が15~20cmほど堆積する状況が判明している。今回の調査においてもこれに基づいて掘削を進めることとして着手したが、東1区の表土掘削を開始して間もなく、地表直下から遺構確認面付近にまで達する攪乱土壌が広範囲に認められた。

今回の調査での遺構検出作業については、第1章第2節の中でもふれたとおり、バックホーによる表土掘削を遺物包含層上面で止め、残りを手作業により掘り下げていく手順をとったが、遺物包含層として残っていたのは調査区北端の僅かな部分のみであり、そのほとんどは先述した攪乱土壌によるものであった。その範囲は、調査区北端付近から南へ約20mの間一帯と、そこから6mほど南側に離れた調査区中央から西寄りに約5mの範囲におよぶもので、この部分は、遺構検出時においても細かな遺物を僅かに含んだ暗褐色シルト質土と黄褐色シルト質土が混在し、部分的に焼土や粘土がブロック状に混入する不安定な土壌であった。そこで、この調査区では遺構確認面までバックホーで掘削し、遺構検出作業をおこなうこととした。

2号住居跡と3号住居跡の検出は容易におこなえたが、双方の住居跡間は遺構確認面が検出されず、攪乱土壌に覆われていたことから、一帯は後世に破壊を受けた場所と認識して当初は調査対象から除外していた。しかしながら、2号住居跡と3号住居跡の覆土の様相がこの攪乱土壌に類似し、さらに2号住居跡の調査を進める中で、柱穴内から「VI」と書かれた長さ10cm程度の河原石と、「藤井」と書かれた軍手が一緒に出土（註3）したことから、2号住居跡や3号住居跡の覆土や周辺に広がる攪乱土壌は以前に何らかの形で掘削（調査）を受け、その後埋め戻されたものであると推測するに至った。

そこで、攪乱土壌内部の状況を確認するためのトレンチを設定して調査をおこなったところ、明瞭な掘り込みや遺構などは検出できなかったものの、東西に設けたトレンチの約30cm下部



で焼土の散布が認められ、その脇から、少々読みにくいが「1960.8/15教育大」と書かれた長さ17cm程の細長い河原石が出土した。

これを受け、城ノ内遺跡での過去の調査歴を確認した結果、周辺が教育大調査地点である可能性が高くなった。

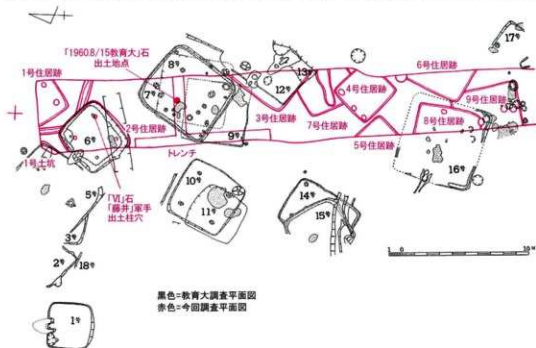
出土資料の検証と調査地点の特定 まず、2号住居跡柱穴内から出土した「VI」石であるが、この「VI」は教育大調査6号住居址(註4)を示しているとみることができ、規模や形状、柱穴の位置、壁溝の有無まで2号住居跡とはほぼ同一である。また「藤井」軍手は、教育大調査に調査員として参加していた藤井功氏(当時、東京都立羽田工業高校教諭)の所有物であったと推測できる。ただし、6号住居址は昭和33年度に調査されているが、この年の調査に藤井功氏が参加していたかどうかは定かでない。

次に、トレンチ内から出土した「1960.8/15教育大」石についてであるが、昭和35(1960)年は調査最終年度であり、報告書によれば、この年の調査期間は8月5日～16日と記されている。このことから、この石は昭和35年8月15日に発掘調査現場に遺された石と考えることができよう。

第103図は、教育大調査地点の平面図に今回の調査地点平面図を重ね合わせたものである。

教育大調査地点の平面図には座標が記されていないため座標上での照合は不可能だが、2号住居跡から出土した「VI」石の存在から、2号住居跡と教育大調査6号住居址が同一の遺構と仮定しこれを基準とした。また、方位についても教育大調査とは差異が生じているが、図中には今回調査の方位を記載した。

測量技術や方法の違いから若干のズレがあるものの、3号住居跡が教育大調査12号住居址となり、1号土坑は教育大調査5号住居址の北東隅にあたると思われる。その他、8号住居跡が教育大調査16号住居址に、その南側に広がる焼土とピットからなる範囲が9号住居跡に、それぞれ相当すると思われる。そして「1960.8/15教育大」石は、その出土地点から、昭和35年度に調査された教育大調査



第103図 教育大調査地点と今回の調査地点(1:300)

7号住居址内に遺されたものであると想定することができる。

調査範囲や期間の制約、調査当初の認識不足により、当時おこなわれた発掘調査の全容を明らかにするまでには至らなかったが、遺構の配置や、約半世紀ぶりに出土した“遺物”から、この場所が教育大調査地点であることはまず間違いないと言え、教育大調査地点を特定するに至った。

最後に 今回の調査は道路の拡幅工事に伴うものであり、この道路の両側をトレンチ状に発掘調査したものであったが、国道18号から屋代工業団地内入る主要道路として、また国道403号土口バイパスが接続している関係もあって非常に交通量が激しい場所である。そのため発掘調査中の安全監視には特に気を遣ったが、調査期間中は事故もなく、無事発掘調査を終了できたことは幸いであった。このような環境の中、発掘調査に従事された皆様には心より感謝申し上げる次第である。

調査遂行に際して、重機の手配から運用に係る一切と、調査期間中の安全面については駒武田組にご尽力を賜り、また、調査地に隣接する地権者の皆様並びに、中沢製作所、サクラ精機㈱、長野電子工業㈱の関係諸氏には、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力を頂戴した。

末筆ながら、発掘調査から整理調査、調査報告書刊行に至るまで、あらゆる面でご指導とご協力いただいた多くの関係機関・諸氏に対し御礼申し上げ、本調査のまとめとする。

註

1) 71号土坑の覆土は、やや粘りのある明黄褐色シルト質土を呈しており、一見すると遺構確認面とした土壌との区別がつかない。71号土坑の場合、遺構検出作業時や46号住居跡（古墳時代）壁面から遺物がある程度まともに出てきたことから、その周辺を精査した結果遺構の存在を認識することができたが、遺物が出土しなかった場合は見過ごしてしまっていた可能性が高い。

当該地の弥生時代遺構の覆土は暗灰褐色シルト質土を基本とするため遺構の検出が比較的容易であるが、これとは異なる覆土となることから平面観察での判別が難しく、また遺構の重複が著しい地域だけに存在を確認できていない弥生時代の遺構も相当数あるものと思われる。これまでの調査において弥生時代の遺物の多くが検出面、もしくは遺構外の出土遺物として処理されている現状を考えると、遺構の検出に際しては十分な注意が必要である。

2) 調査は大塊遺跡として実施し報告されているが、この溝跡が検出された場所は実際には城ノ内遺跡の範囲内となる。

3) 2号住居跡の柱穴内から出土した「VI」と書かれた石と「藤井」と書かれた軍手については、調査担当者のミスにより紛失してしまい写真等の記録もない。2点とも黒いサインペンのようなもので書かれており、軍手は左右のどちらかは不明ながら角張った大きな字で書かれていたと記憶している。もう片方の軍手は出土していない。

4) 今回の調査で検出された竪穴住居遺構には「跡」の字を用いたが、東京教育大学「城の内」報告書では「址」の字を使用している。そのため、本文中でそれぞれの調査の遺構名を記載する場合、遺構名表現に違った字を用いる形となってしまっているが、混同を避け双方を区別するために、東京教育大学の調査で検出された竪穴住居遺構については遺構名の前に“教育大調査”を冠した上で、調査報告書掲載のまま「址」の字を使用した。

参考文献

- 岩崎卓也 1982「城ノ内遺跡・灰塚遺跡・生仁遺跡・馬口遺跡」『長野県史』考古資料編全一巻（二）
主要遺跡（北・東信）（社）長野県史刊行会
- 木下 亘 1985「更埴市城城の内遺跡出土の陶質土器について」『信濃』第37巻第4号 信濃史学会
- 更埴市教育委員会 1961『城の内－信州千曲河岸の土師式集落遺跡の研究』
- 更埴市教育委員会 1971『下糸・灰塚』
- 更埴市教育委員会 1988『屋代遺跡群・更埴条里水田址詳細分布調査報告書』
- ①更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会 1989a『城ノ内遺跡Ⅱ・大境遺跡Ⅲ』
更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会 1989b『生仁遺跡Ⅲ』
- ②更埴市教育委員会 1990『平成元年度 更埴市埋蔵文化財調査報告書』
- ③更埴市教育委員会 1991『屋代遺跡群 城ノ内遺跡Ⅲ・荒井遺跡Ⅱ』
- ④更埴市教育委員会 1994『屋代遺跡群 大境遺跡Ⅳ・Ⅴ』
更埴市教育委員会 1995a『屋代城跡範囲確認調査報告書』
更埴市教育委員会 1995b『荒井遺跡Ⅲ・宮浦遺跡』
- ⑤更埴市教育委員会 1996『屋代遺跡群 城ノ内遺跡Ⅳ』
更埴市教育委員会 2000『屋代遺跡群』本文編
更埴市教育委員会 2002『屋代遺跡群 附松田館』
- ⑥更埴市教育委員会 2003『平成14年度 更埴市埋蔵文化財調査報告書』
笹澤 浩・岡田正彦 1969「更埴市城ノ内遺跡」『信濃考古』№27 長野県考古学会
- ⑦千曲市教育委員会 2004『平成15年度 更埴市埋蔵文化財調査報告書』
- ⑧千曲市教育委員会 2005『屋代遺跡群 荒井遺跡5』
- ⑨千曲市教育委員会 2007a『屋代遺跡群 城ノ内遺跡8』
- ⑩千曲市教育委員会 2007b『平成17年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書』
- ⑪千曲市教育委員会 2008『屋代遺跡群 城ノ内遺跡10・荒井遺跡6』
- ⑫千曲市教育委員会 2012『屋代遺跡群 荒井遺跡7』
長野県教育委員会編 1968『地下に発見された更埴市条里遺構の研究』
長野県・更埴市教育委員会 1969『生仁』
長野県埋蔵文化財センター 1998『更埴条里遺跡・屋代遺跡群』
- ⑬長野県埋蔵文化財センター 2000a『屋代遺跡群 国道403号土口バイパス埋蔵文化財発掘調査報告書』
長野県埋蔵文化財センター 2000b『更埴条里遺跡・屋代遺跡群』総論編

*○数字は、第102図内の調査地点番号に対応する文献である。



1号住居跡



10号住居跡カマド遺物出土状況



2号住居跡



12号住居跡



4号住居跡



1号掘立柱建物跡



6号住居跡



18号住居跡



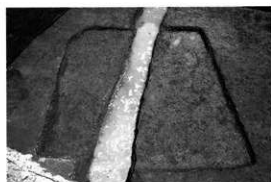
東2区全体写真



24号住居跡



東3区全体写真



30号住居跡



西1区1次調査面全体写真



32号・35号住居跡



西1区中世土抗群



32号住居跡カマド



33号住居跡遺物出土状況



46号住居跡



33号住居跡



50号住居跡



33号住居跡カマド



51号住居跡



西2区全体写真



51号住居跡カマド



第10图 1



第19图19



第10图 6



第21图 1



第12图 1



第21图 3



第19图 1



第27图 1



第27图11



第30图25



第27图16



第30图26



第29图 9



第32图 8



第29图17



第40图 9



第46图 2



第61图 5



第48图 8



第77图 1



第54图 2



第77图 5



第57图 5



第79图

報告書抄録

ふりがな	やしらいせきぐん しろうのちいせき9							
書名	屋代遺跡群 城ノ内遺跡9							
副書名	都市計画道路一重山線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
編著者名	寺島孝典							
編集機関	千曲市教育委員会 文化財センター文化財係							
所在地	〒387-0012 長野県千曲市大字板堂268番地1 TEL 026-261-3210							
発行年月日	2013年3月25日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
屋代遺跡群 城ノ内遺跡	長野県千曲市大 字屋代城ノ内 1343番地5ほか	20218	31-7	36° 32' 57"	138° 08' 13"	20060508 ～ 20061127	1.100㎡	道路改良
所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
屋代遺跡群 城ノ内遺跡	集落	弥生時代	竪穴住居跡 土坑	1棟 1基	土器・石器		古墳時代から平安時代の大規模集落跡を調査。 昭和30年代に実施された東京教育大学（現筑波大学）調査地点を特定することができた。	
		古墳時代	竪穴住居跡 土坑 溝跡	26棟 7基 6基	土器・玉類			
		奈良・平安時代	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 土坑 溝跡	26棟 2棟 19基 4基	土器・灰釉陶器			
		中世	土坑 溝跡	41基 5基	土器・陶器・銭貨			
		時期不明	ピット	46基				
要約	弥生時代では中期後半の遺構が検出された。集落としてのまともには確認できなかったものの、荒井遺跡から城ノ内遺跡にかけて居住城が展開していることが改めて確認できた。古墳時代は主に5世紀から6世紀にかけての集落が広範囲にわたり展開しており、古代は9世紀が集落形成のピークとなるようである。中世では居館堀跡と考えられる大規模な溝跡や井戸跡が検出された。							

千曲市埋蔵文化財発掘調査報告書

2004年	更埴条里水田址七ツ石地点
2005年	厩代遺跡群荒井遺跡5 更埴条里水田址七ツ石地点2・粟佐遺跡群宮裏遺跡Ⅱ
2006年	東條遺跡 厩代遺跡群大境遺跡8 平成15・16年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書
2007年	厩代遺跡群城ノ内遺跡8 粟佐遺跡群五輪堂遺跡8 更埴条里水田址油田地点 厩代遺跡群大境遺跡9 平成17年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書 八幡遺跡群大造遺跡 千曲市内古墳範囲確認調査報告書
2008年	町裏遺跡 厩代遺跡群城ノ内遺跡10・荒井遺跡6 平成18年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書 粟佐遺跡群南沖遺跡4
2009年	平成19年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書
2010年	平成20年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書
2011年	平成21年度 千曲市埋蔵文化財調査報告書
2012年	厩代遺跡群荒井遺跡7 厩代遺跡群馬口遺跡8 厩代遺跡群地之日遺跡2・古道遺跡2
2013年	粟佐遺跡群琵琶島遺跡2・厩代遺跡群町浦遺跡4

厩代遺跡群 城ノ内遺跡 9

発行日	平成25年3月25日
発行	千曲市教育委員会 文化財センター 〒387-0012 長野県千曲市大字桜堂268番地1 TEL 026-261-3210 FAX 026-261-3211 E-mail bunkazai@city.chikuma.nagano.jp
印刷	信毎書籍印刷株式会社 〒381-0037 長野市西和田一丁目30番3号 TEL 026-243-2105
